

(2018 年 3 月 7 日)

67 「太陽の道」の歴史地理学

筑紫と大和で制定された太陽の道

緒言

先の論考「『太陽の道』の考古学」は、古代、沖ノ島を通る緯度線が春分・秋分の太陽の道と見なされたこと、また、福岡都市圏で発見された三つの著名な古代遺跡（吉武高木遺跡・三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡）がそれぞれ三つ（春分・秋分と夏至と冬至）の太陽の道を礼拝するスポットにあったことを論証した。陸でも太陽の道が尊崇されたことは、時代の異なる三つの王墓が偶然と考えることのできないきわめて高い精度で、東の宝満山と西の飯盛山を結ぶ東西線上に次々に築かれたこと、さらに、第四の平原遺跡の1号墓が三雲南小路遺跡と連関して冬至の太陽の道を指し示すことで、端的に証明された。「太陽の道」の考察は人文地理学に属するが、表題を「『太陽の道』の考古学」としたのは、論証が考古学的な事実に基づいていることを強調するためであった。その議論が援用したのは数値で表わせる地理的事実だった。

わたしの思索は、昔 NHK のテレビ番組とそれを書物にした水谷慶一著『知られざる古代』に啓発されて始まった。その番組は、伊勢斎宮を通る緯度線上に奈良県三輪山のふもとの檜原神社や箸塚があると論じて、映像の力で「太陽の道」という概念を広く知らしめた（「太陽の道」という言葉は、小川光二著『大和の原像—古代祭祀と崇神王朝』で最初に使われた）。しかし、大和—伊勢の太陽の道は、沖ノ島や琉球の久高島ほど由緒ある「太陽神の宿る島」をその線上にもたず、代わりに伊勢斎宮を礼拝の対象としているように見える。むしろ、先の論考で示した宝満山と飯盛山を結ぶ陸の太陽の道の発展形と考える方がよいだろう。ところが、宝満山と飯盛山を結ぶ太陽の道は、磐座のある宝満山山頂から太陽の宿る島沖ノ島を見通せることで支えられていたのに対し、沖ノ島を遠く離れた伊勢斎宮と三輪山を結ぶ太陽の道にはその支えがない。琉球では、統一を果たした王朝が祭政一致の体制をつくるために、既存の久高島崇拜を、王宮を通る太陽の道に改変して制度化した。伊勢斎宮も、そういう歴史的・政治的な進展があってつくられたと考えるべきだろう。その変遷の歴史を究明することが本稿の目標である。

今回は前回のように考古学的事実だけで議論するわけにいかず、限定的にせよ、書かれた歴史に依拠せざるをえない。その史料としては『古事記』と『日本書紀』しかない。中国史書はこの問題の解明に役立たない。解明しようとする太陽の道

は、王によって制度化された太陽の道であるが、『記・紀』は大和の王が神代から引き継いで日本列島を支配したと主張する書物である。そのイデオロギーは、九州に先在した沖ノ島を通る海の太陽の道と三つの遺跡を通る陸の太陽の道すら否認しかねない。そのような書物に依拠して太陽の道が時代とともにどのように変遷したかを考察するのは困難をとまなうだろう。歴史学者の中には、大和の王について、神武から九代ぐらいの記述は創作だ、応神以前は実在しない、実在が確実なのは継体以後だ、などとする人がいるらしい。そういう史料を浅学の者がどう取り扱えばよいか途方にくれることになる。そこでわたしは、無手勝流の方法を採用することにする。すなわち、『記・紀』の記述を世界史の通則に則って一般的に解釈するにとどめる。そして、前回は神話を考古学的に取り扱ったが、今度は『記・紀』の語りを神話であるかのように遠くに置いて、あまり内容に影響されない外形的な事実だけを素材にして議論してみよう。歴代の大和の王たちの系譜、王の居所と墓を地図に描いて、伊勢斎宮よりも以前に太陽の道があったかどうかの痕跡をまず検査する。王の宮や陵墓の宮内庁による認定は『記・紀』の書く地名に基づいてなされている。その認定に疑義があるとしても、一枚の奈良・大阪の地図に書きこむときには誤差はあまり見えないだろう。それでも残る錯誤を無視しても太陽の道と呼べるものが見つかるかどうか探ってみた。

その結果、三輪山と伊勢斎宮を結ぶ東西線を太陽の道と設定する以前の大和に、九州の太陽の道と同根の太陽崇拜の形式があったことが浮かび上がった。また、太陽神を祀る皇大神宮が伊勢斎宮とはかなり異なる緯度線上にあることはこれまで議論されてこなかったが、現在の場所に築かれた皇大神宮を通る東西線こそ律令国家の制定した太陽の道だという新しい知見に至った。

じつは、前稿で宝満山と飯盛山を結ぶ春分・秋分の太陽の道が存在したことを見出したとき、それとセットになった冬至の太陽の道の標識を見て、昔その山を通る東西線が太陽の道だと直感したことが正しいと自信を深めた。このもう一つの太陽の道を構成する標識の緯度を精確に調べて、それは確信になった。しかし、その議論を前稿に加えることはためらわれた。歴史時代の議論が、動かせない考古学的事実に支えられた宝満山と飯盛山を結ぶ太陽の道の確実性を弱めてしまうことを恐れたからである。稿を改めたこの論考で、宝満山と飯盛山を結ぶ太陽の道を継承して、九州に新しい太陽の道が設定されたという仮説を提起する。その九州の新しい太陽の道は、時代の新しい伊勢斎宮や皇大神宮を通る太陽の道に似ていて、後者の前例となっただろうことが見てとれる。

極力歴史解釈が介入しない方法をとるので議論は限定的なものとならざるをえないが、前稿で示した初期の太陽の道から発展した形式の太陽の道が制定されたことが明らかになった。本稿ではそれを単純な形のまま提示し、得られた結果を歴史の舞台において検討するのは続編に譲る。

1. 初期の大和の歴史状況と太陽崇拜

初期王統についての予備的学習

奈良盆地には数多くの遺跡がある。しかし、わたしの知識が乏しいせいだろうか、『大和の原像 古代祭祀と崇神王朝』や『知られざる古代』が提起した「太陽の道」という視点からの学問的な議論をあまり聞かない。そこで、大和にどのような太陽崇拜の形式があったかを探る手がかりを得るため、「歴史」の語ることを加味して、考古学的遺跡を地理的に考察することにする。まずは、最初期の大和の王統がどのようにして奈良盆地で首長権を確立したか、その後どういうあり方をしたか、『古事記』と『日本書紀』の語るところを聞くことから始めよう。その際、緒言で明らかにした接近法に則って、その語りを鵜呑みにしないように気をつける。ところが、『記・紀』に語られる王たちの名をどう表現するかがすぐに問題になる。歴史状況を正確に表現する名を選ぶのはむずかしい。慎重な歴史家・考古学者は何々天皇という後世の贈り名を使うことを避けるけれども、ここでは、簡便に人物を区別するための記号としてそれを用い、第何代何々王と呼ぶ。王と呼ぶのにも問題があるかもしれないが、前稿でも九州の弥生時代の遺跡に三種の神器とともに葬られた人物を王と呼んだのと同様に、一定の地域に権威をもった首長を一般的にそう呼ぶことにする。

王権を確立した初代王はどこでも多くの説話で語られるものである。大和の初代王とされる“神武”の場合も例外ではない。筑紫から大和への遠征行と大和での戦争の勝利を語る内容に深入りしないけれども、前稿で見たように『記・紀』神話の原型が九州でつくられたことは確実だから、九州から来た集団が奈良盆地で一定の地保を固めたという主張は本当だろう、とわたしは判断する。初期の王たちの簡単な記述は、その主題が王統を語ることにあったことを教える。記述が簡単すぎることは、その実在を否定する根拠にはならない。『古事記』は、初代神武王の成功譚のあとに家族のことを語りだし、征服地の女性を后としたとする。この話は意味をもっているだろう。侵入した神武は息子を連れていたが、征服地で若い妻を娶った。神武が亡くなるとその息子があとを継ぎ、父の妻だった女性を自分の妻とした。これは東アジアの習俗として珍しいことではない。その後、神武とこの女性とのあいだに生まれた息子たちが九州から来た異母兄を討ち、その襲撃で主役を果たした息子が位を継ぐ。征服者が征服地の女性とのあいだにもうけた子が、その土地の人々の支持を得て支配を安定させたのである。これも、世界のどこでも起きた事例に則している。説話に文飾があるとすれば、神武の妻となった女性が神の子とされていることや、殺された兄を庶兄と表現して位に就いたと書かないことだろう。『日本書紀』では、父の妻だったその女性が九州生まれの跡継ぎの妻となったことも消されている。ここまでの『記・紀』の記述は、事実ありえたこととして理解することが可能である。

ところで、奈良盆地中央部には唐古・鍵遺跡がある。ここは、弥生時代前期から始まる遺跡で、中期にも後期にも大きな環濠集落を形成し、銅鐸など青銅器を生産した痕跡をもつ。大きな銅鐸がたくさん出土する時代とそのあとの時代とのつながりが希

薄なようにも見えるので、初代神武王が九州から侵入して奈良盆地南部にある畝傍山のふもとに宮を置いたとする『記・紀』の記述を創作として切り捨てるのは、方法上適切ではないだろう。畝傍山周辺遺跡の遺物を唐古・鍵遺跡の遺物と比較して、前後関係など科学的検査法を用いて考古学的に検討すべきであろう。インターネットでそういう研究があるかどうか探したが見つからなかった。

しかし、『記・紀』の王統の記述に依拠すれば、絶対年代がかなり確かな継体王からの常識的な逆算によって応神王の時期を概算することができ、それから神武の時代も誤差がおおきくてもおおよそ推定することが可能である。そうして推定される神武の時代は、おおざっぱに言って、唐古・鍵遺跡の環濠集落の時代と重なる蓋然性が高い。ところが、その時代の唐古・鍵遺跡は大きな規模をもち周辺との交流・交易も見受けられる。外部の集団が奈良盆地に侵入したとすると、ギリシアの都市国家の人々がイタリアやシチリアへ植民した様態と異なると考えなければならない。侵入集団はそれなりの規模で準備を整えてやってきたと考えるべきだろう。『記・紀』の遠征行と戦争の記述はそのことを表現しているのではないだろうか。『記・紀』が主張しているように、神武たち兄弟が九州の有力な氏族の出自だった可能性がある。考古学的調査は唐古・鍵遺跡の環濠集落が弥生時代後期にもあったとするから、神武の後継者たちと唐古・鍵遺跡との関係がやはり問題となる。この問題は、神武に始まる王統があったとすると、その実効支配権の範囲にかかわる。わたしはそれを論じる力をもたないので、その議論をパスせざるをえない。

初代王のあとの八代の王について、『記・紀』は王統と係累、宮、墓のことを述べるだけである。しかし、第7代王と第9代王の宮が奈良盆地中央部と北部にあったとする記述は、中部以北への支配権の拡大を示唆していると解釈可能である。第10代崇神王になると、覇権は奈良盆地を出てずいぶん広域に及んだと書き、この王に「初国を支配した王」という意味の呼び名をつけている。この表現は、最初から日本列島西部全域を支配したのではないことを告白している。あとで図示するように、崇神王の宮は三輪山のふもとに置かれ、第11代垂仁王と第12代景行王の宮もその付近の巻向に置かれたと書かれている。ここが本拠地となったのである。景行王の事績として九州巡行が書かれ、子のヤマトタケルの諸国遠征譚が加えられている。その内実は検討されなければならないが、覇権の拡大を表現しているのかもしれない。この代に九州との交渉が強まったことを示しているのだろう。『記・紀』の語りから、第10代～第12代の三人の王の時代が全盛期だったと理解してよいだろう。ところが、第13代王については、系譜と宮と陵墓のことしか書かない。しかもその宮は遠く今の津山市にあったという。これはこの王権に変事が起きたことを示唆する。

後半の本拠地が置かれたのは纏向遺跡の見つかった周辺である。唐古・鍵遺跡から4.6km 東南にある。両遺跡は関連をもっていた可能性が高い。第11代垂仁王の陵墓は今の奈良市にあったとされるが、宮内庁によって認定されている崇神・景行の陵墓は巻向付近にあり、三つとも大きな前方後円墳だ。ここにあるいくつかの前方後円墳の被葬者の具体的な認定に誤りがあるとしても、『記・紀』の語るこの前後の王権が

この地に存在したであろうことを疑う理由はない。纏向遺跡のどの時代を対応させるか問題があるけれども、それらの王たちが大きな規模をもつ纏向遺跡を本拠地としたとすることは合理的な解釈だろう。纏向遺跡の全盛期が第 10 代～第 12 代の三人の王の時代と重なる可能性が高い。

初期大和の太陽崇拝の形式

以上の記述は、初期王権の時代について語るのに必要な最低限の言葉を提出するためであった。その議論が、太陽の道という観念があったかを探る以下の議論を左右することはない。ここからは、緒言に述べた方法に従って議論しよう。

図 1 に、初代から第 13 代王までの宮と陵墓とされる場所がどこかを示す。説話は初代神武王が本拠地を畝傍山付近に置いたとするが、第 2 代王の宮が南西の葛城に置かれて以来そちらも副本拠地だったように見える。第 2 代王の母の出身氏族がそちらに地盤を維持したことの現われかもしれない。第 9 代王の宮と墓はこの図をはみ出る現代の奈良市にあったとされる。第 8 代を例外として、第 7 代からは本拠地が北に移り、第 10 代から巻向に落ち着いたことが分かる。以前、大和の王権は氏族の連合に支えられたという見解を読んだことがある。時代の進展につれて競争や闘争があったと考えるべきで、宮の変遷は他の氏族との連携と関連するのだろう。そのことは、短い記述の中に王統の婚姻関係や他の氏族の名を記すことに現われている。

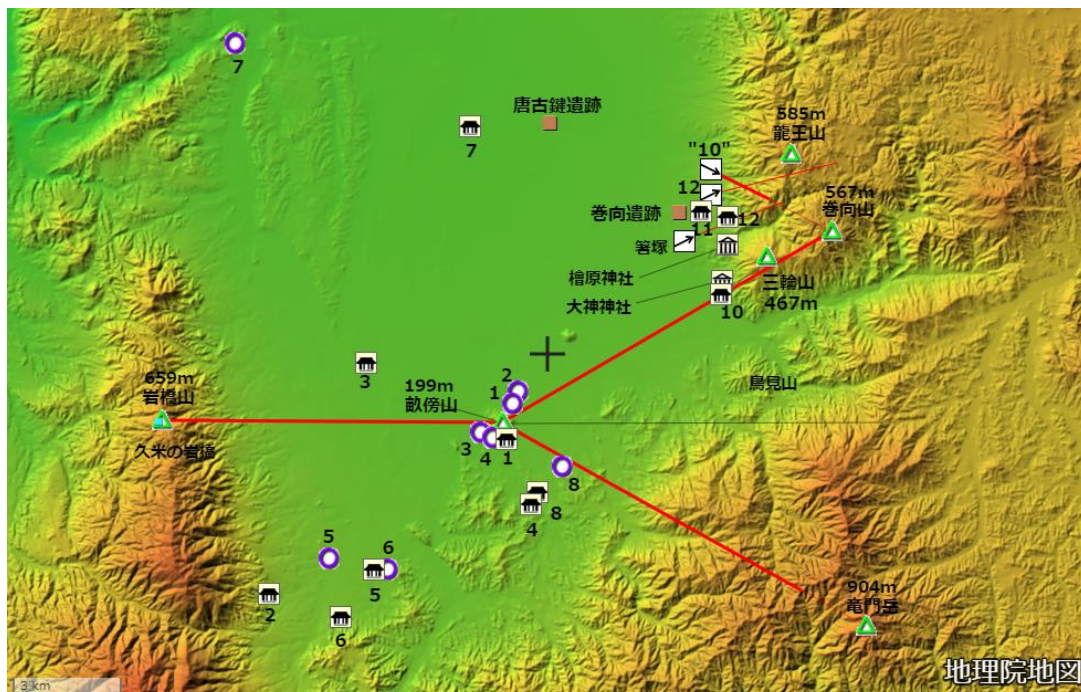


図 1. 十三代までの大和の王の宮と陵墓の位置：

家型の記号で宮の伝承地を、紫の円で陵墓比定地を、巻向にある大きな前方後円形の陵墓をとくに矢印をもつ四角形で示した。番号は王の代数を表わす。

初代王が畝傍山のふもとに宮を置いたという記事に意味があるのかを探るために、畝傍山から見て夏至と冬至の日の出の方角に名のある山を探して緑の三角印で示し、畝傍山の頂上と赤い直線で結んだ。畝傍山を中心とする水平面で、夏至の日の出の方角は緯度線から -30 度、冬至の日の出の方角は $+28$ 度である。これに対して、巻向山の方角は約 -30 度、竜門岳の方角は約 $+29$ 度で、うまいぐあいにはほとんど一致する。畝傍山が高さ199mで、そこから約10.9kmの距離にある巻向山の標高が567m、約11.8kmの距離にある竜門岳の標高が904mである。「『太陽の道』の考古学」で議論したように、山の尾根に出る日の出の方角は山の高さが高くなるほど南にずれるが、上述の角度の一致なら、巻向山と竜門岳はりっぱに夏至と冬至の日の出の標識の役目を果たせる。畝傍山から巻向山に昇る夏至の日の出を拝んだと考えることができるだろう。冬至の日の出の昇る方角にある竜門岳は手前の尾根にはばまれて畝傍山から直視することはむずかしい。竜門岳を遙拝したとしたら、前稿で考えたような観測が行なわれたと推測しなければならない。ここでは、畝傍山から見て冬至の日が昇る竜門岳手前の峰に昇って、畝傍山からの延長線上に竜門岳があることを確認したのだろうか。

だが、これはまだわたしの想像にすぎない。春分・秋分の日の出と日の入りを拝むのにふさわしい山があるだろうか。東の方にそういう山はない。ところが、真西には岩橋山がある。こちらには、太陽の道の崇拝に関係すると考えることのできる標石がある。土地勘のないわたしはインターネットで調べて知ったのだが、岩橋山の山頂付近にある「久米の岩橋」という大きな石である。伝説は、役行者が山岳信仰の対象地だった葛城山から吉野金峰山まで石の橋をかけようとしたというものだ。その大石が伝説を生んだのだろう。ウィキペディアの載せるその石の写真は人の手で彫られたと見える。しかし、1801年に刊行されたという『河内名所図会』に描かれた石は自然石のようだ。伝説には一言主神も登場するが、一言主神は東のふもと葛城に鎮座し、第2代王の宮はその近くにあったとされ、『日本書紀』は第2代王の母がこの神の娘とする。ともかく、この伝説はこの頂上の岩が古くから知られていたであろうことを示唆する。岩橋山を望むとしたら、畝傍山から見る春分・秋分の日の入りが最もふさわしく、「久米の岩橋」は太陽崇拝に関連すると考えることができる。畝傍山から眺める岩橋山・葛城山…と連なる西の山並みが「岩橋」伝説を生んだのだろう。

こういう解釈を裏書きしそうなのが、巻向にある第10代崇神王のものとされる陵墓である。その前方後円墳の主軸は巻向山の方角を指し、巻向山山頂へ延ばす線が緯度線となす角度は約 $+28$ 度である。この前方後円墳は、冬至のころの朝陽がおおよそ巻向山の方から射しこむような場所に築かれたのだろうか。ただし、手前の尾根にはばまれてその墓からは巻向山が見えないようだ。

第12代景行王のとされる陵墓と箸塚古墳は主軸が東北東を指しているが、その延長上に名のある目立つ山は見当たらない。最盛期三代の王の宮があったとされる場所も太陽の方角を意識していたようには見えない。纏向遺跡の場所もどこか標識となる山を特別意識して“都市”が築かれたとは考えられない。ここまでの議論では、九州

にあった宝満山と飯盛山を結ぶ聖別された東西線や夏至と冬至の日の出を拝む特別の山など、王権の設定する太陽の道があったかどうか断言できない。

次に、どのような神々が崇拝されたかを見ておこう。『古事記』は神武王の即位のところで天つ神の子としているが、『日本書紀』は、神武の名に続けて「ホホデミ」と呼んでいる。三雲南小路遺跡から夏至の日の出を拝む高祖山の山麓にある高祖神社の祭神が天孫ニニギの子のホホデミであることと関連するだろう。『日本書紀』はまた、即位後、鳥見山に高祖天つ神を祀ったと書く。その鳥見山に二つの候補地があるが、畝傍山から見て、いずれも春分・秋分や夏至の日の出を拝む方角にはない。考えている太陽の道と直接には関係しないだろう。この伝承が本当に神武時代のものかも信頼がおけない。もう一つ、『古事記』の第10代崇神王の記事には、三輪山の大神主神をその神の子孫という者を神主にして祀ったという記事に並んで、天つ神・国つ神の社を定めて祀ったと書く。『日本書紀』は、もう少し詳しく、崇神王は天照大神と大和の大國魂神の二柱を宮殿内に祀っていたが、それぞれ宮の外に祀ったと書く。大和の大國魂神とは大神主神のことで、大神神社に祀ったと解されている。天照大神を祀った場所は不詳とされているが、今の桜井市にあったと考えられる。現在では、それに当たる神社は三輪山のふもとにある檜原神社とされ、『日本書紀』のこの説話を受けて、檜原神社は元伊勢と呼ばれている。大神神社と檜原神社は、三輪山西側のふもとのおおよそ南北に対称な位置に配置されている。

三輪山は、奈良盆地の中央に立って見渡せば目立つ山で、山中に磐座となる多くの岩があり、古くから山全体が磐座として信仰の対象だったと考えられる。『日本書紀』の説話は、崇神の王統が奈良盆地の出自ではなく、九州からもちこんだ天つ神・国つ神に加えて、奈良盆地で古くから崇拝されていた三輪山とそこの地祇である大神主神＝大和の大國魂神も尊崇の対象にして、地元民の信仰と融和を図ろうとした、と解釈できる。しかし、巻向にある宮や陵墓の位置から見上げて、三輪山が春分・秋分・夏至・冬至の日の出を拝む太陽の道の標識とされたとは考えにくい。大神神社はもちろん、檜原神社も三輪山を真東に見る位置には置かれていない。『知られざる古代』は檜原神社と箸塚が伊勢斎宮を通る東西線上にあるとするが、図1の拡大図を見ると東西には並んでいない。この二つはそれほど離れていない時代につくられたと考えられるが、近い距離なのに、東西線上に並べようと意図されてはいないのである。須玖岡本遺跡そばの熊野神社とはちがって、この元伊勢と言われる檜原神社に聖別された春分・秋分の太陽の道は通っていなかったとしてよいだろう。それでも、現在でもほとんど鳥居だけという檜原神社の示すあり方は、古式を体現しているのかもしれない。その祭神は、天照大神の若御霊の神とイザナギ・イザナミである。須玖岡本遺跡そばの熊野神社に対応して、イザナギ・イザナミを祀り、さらに天照大神も祀っている。たしかに元伊勢と呼ばれるのにふさわしい祭神だ。初代神武王のとき祀ったとされる皇祖天つ神もこの三神だったのだろうか。

唐古・鍵遺跡を中心に置く見方

図1を描いてわたしの得ていた感触は以上のようなものだった。そういうとき、出来上がった前稿の話聞いてもらうために、吉竹高木遺跡・三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡のある福岡市・糸島市・春日市の遺跡担当の人に会いに行った。そして糸島市で、大和の古墳についての考古地理学と言える北條芳隆論文二編の写しをもらった。地理院地図で名のある山に注目していたとき、龍王山は、近くの渋谷向山古墳（“景行陵”）も箸塚もそちらを向いていず、特別の意味をもっていないように思った。ところが北條論文は、龍王山の峰々こそが、そのあたりでも、また、遠く大阪平野でも古墳の配置を決定したと論じている。そして、ふもと近くから見ると、三角点の置かれた標高585mの最高峰よりも北側にある520mの峰の方が高く見えると指摘している。わたしは、前稿で遺跡に注目して考えたのにここではそれを怠ったことに気づかされた。時代の古い唐古・鍵遺跡を視点の中心に置いてみなければならない。

唐古・鍵遺跡のどこの緯度を示せばよいか問題があるが、仮に地理院地図で池の南に記された目印の位置を採用して北緯34.5690度としておこう。龍王山三角点は北緯34.5615度に、520mの峰は北緯34.5655度にある。地理院地図をよく見ると、もう一つある峰に標高522mと書いてあり、その場所は北緯34.5697度だ。唐古・鍵遺跡とこれらの峰との位置を地形図に表示したら図2のようになる。図2には、北條論文が付近の古墳群の基準観測点とした西山古墳-箸塚古墳中央位置（北緯34.5655度）と、古墳の配置を論じる際に指標の一つとした衾田陵も示してある。衾田陵後円墳は北緯34.5687度にある（北條論文は唐古・鍵遺跡が衾田陵後円墳の真西にあるように図示している。それを重視すれば、唐古・鍵遺跡の緯度は先ほど採用した値でほぼよいだろう）。図2で、唐古・鍵遺跡から7.18kmの距離にある標高522mの峰へ伸ばした直線はほとんど緯度線に沿う。ただし、注意して見ると、522mの峰は唐古・鍵遺跡を通る東西線よりも0.0007度ほど北に位置していて、微妙に傾いていることが感知できる。しかしこのずれは、九州の太陽の道で論じた須玖岡本遺跡の熊野神社と大城山や宝満山との緯度のずれよりも小さい。唐古・鍵遺跡に視点を置けば、522mの峰は春分・秋分の日の出の標識となる要件を十分に満たす山と言える。地形図も、この峰がほぼ一つの山塊をなすピークであることを教える。したがって、唐古・鍵遺跡の方が、理論的に計算して得られた観測点よりも、古代人の見た東の山並みを人文地理学的に考察するのにふさわしい、とわたしは考える。上で、地理院地図の示す標高522mの点の緯度を採用したが、唐古・鍵遺跡の場所から見てその峰をそれほど精確に見定められた

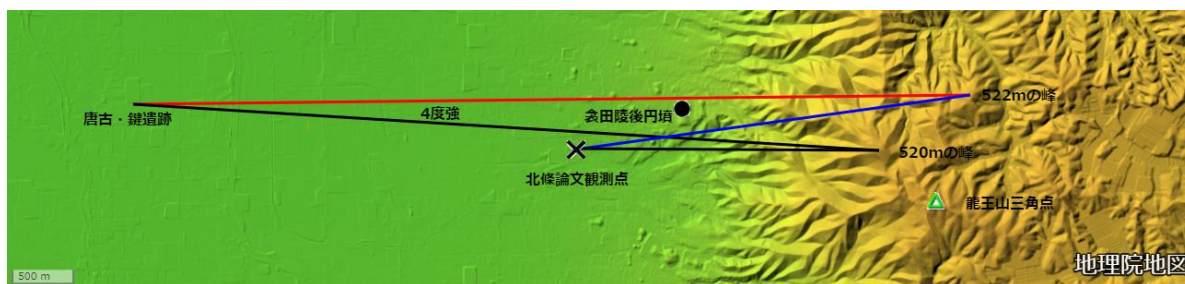


図2. 唐古・鍵遺跡から見た東の山並み

か疑問で、モニュメントのようにその手前に南北に横たわっている衾田陵の後円墳の緯度を参考にした方がよいのかもしれない。

九州には、春分・秋分の太陽の道だけではなく、夏至と冬至の太陽の道もあった。唐古・鍵から見て、夏至と冬至の日の出の標識となる山はあるだろうか。唐古・鍵遺跡を中心とする水平面で、夏至の日の出の方角は約 -30 度、冬至の日の出の方角は約 $+28$ 度である。そして、地理院地図はそれぞれの方角に目立って名のある山があることを教える。夏至の日の出の方角に標高 497m の大国見山があり、緯度線となす角度は約 -30 度、そこまでの距離は 8.19km である。唐古・鍵遺跡から見て大国見山の後方にもっと高い標高 632m の高峰山がある。太陽の道の標識の山はこちらの方がふさわしいかもしれないが、ほぼ重なって見えそうなので手前の大国見山の名を挙げておく。しかし、大国見山という名はそこに登って四方を見たことを示すから、うしろの高峰山が認識されていた可能性は高い。冬至の日の出の方角には標高 467m の三輪山があり、緯度線となす角度は約 $+32$ 度、そこまでの距離は 7.22km である。山の尾根から出る日の出が南にずれることを考慮すると、九州にあった太陽の道の標識の山と同程度に、大国見山（あるいは高峰山）と三輪山はそれぞれ夏至の日の出と冬至の日の出の標識となることができる。以上を図示すれば図 3 のようになる。

太陽の道という観点を導入すれば、北條論文が指摘する「箸塚と行燈山古墳(“崇神陵”)の二つの前方後円墳の主軸がほぼ斎槻岳を指している」ことの意味が理解可能になる。斎槻岳は二つの古墳から見ておおよそ夏至と冬至の日の出の方角にあり、夏至と冬至の太陽の道の形式に倣っているのだ。そう考えると、斎槻岳はおおよそ行

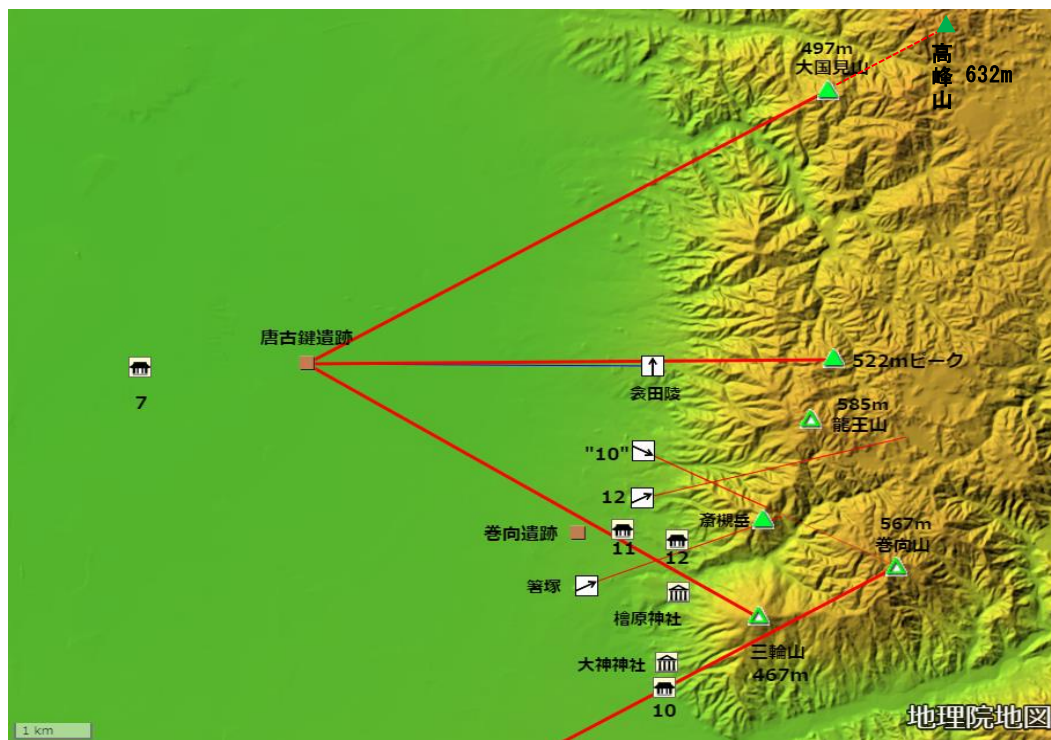


図 3. 唐古・鍵遺跡を通る春分・秋分、夏至、冬至の太陽の道

燈山古墳から巻向山へ延ばす直線上にあるのだから、先述の「“崇神陵”は冬至の日の出の方角にある巻向山の方角を指している」という解釈が復活する。図1で考えた「畝傍山から見て、夏至の日の出の方角に巻向山があり、冬至の日の出の方角に竜門岳があり、春分・秋分の日の入りの方角に岩橋山がある」という自然の事実も奈良盆地では意識されていた、と考えてよいだろう。

こうして、弥生時代の大和にも春分・秋分、夏至、冬至の太陽の道が存在した、という仮説が成立する。この仮説は、北條論文がこの地域の古墳群についてその位置や前方後円墳主軸の方角を論じた議論に根拠を与えることができる。前稿で水稻栽培の生活が暦や方位に対する感覚をやしなって「太陽の道」という観念に結晶したと考えたのだが、信仰の様式は水稻栽培といっしょに大和にも伝播したのだろう。その心的傾向がこの地域の古墳の在り方にまで影響した、と認めることができる。“神武”たちが九州からやって来る以前の唐古・鍵遺跡の時代から、大和に太陽の道という観念があったと考えてよいだろう。

図3を見て一つ気づくことがある。陵墓と王の宮が、前稿で見た九州の場合とちがって、東の山並みに沿って南北に分布することである。この差異は地形によってもたらされたのだろう。福岡都市圏が北にある博多湾と糸島水道の南に東西に広がる地形なのに対して、東側と西側の山並みに挟まれて南北に長い奈良盆地の地形が、南北に活動域が広がるのを助長するのだ。それで、九州では東西方向の太陽の道が強調されるように遺跡ができたのに対して、奈良盆地では、王の宮や墳墓が日の出の方角にある南北に走る山並みに沿う山の辺に配置される傾向が生じたのだ。

北條論文では、磐座をもち古くから山全体が崇拝の対象だった三輪山が格別の役割を果たさない。ところが、三輪山が、磐座をもつことだけからではなく、冬至の太陽の道の標識となる山だということになると、その重みは増す。須玖岡本遺跡に対する冬至の太陽の道の標識である山が宮地岳という名を勝ちえたように、三輪山が霊山になったもう一つの大きな理由はそこにあるだろう。九州の太陽の道は、神話に登場する高天原の神々に対する尊崇と結びついていた。同様に、第10代崇神王のとき三輪山のふもとに檜原神社を建てたという説話が意味をもってくる。檜原神社には、須玖岡本の熊野神社に祀られたイザナギ・イザナミ夫婦神と、加えて子である太陽神が祀られた。それだけでなく、同時に、地元の神「大物主神」が三輪山の主神として祀られた。この説話は、『記・紀』が初代王は九州から来て第2代王は地元の有力氏族の出自らしい母から生まれたと語るのに整合的である。大和の王統は、九州からもちこんだ高天原の神々と大和固有の神の両方を尊重したのである。

神のことが出たので、古代人の心性にもう少し触れておこう。北條論文は、墳墓群が山の辺に築かれたのを、山が異界あるいは黄泉の国への境界であるかのように解釈しようとしている。しかし、太陽の道の観点からは、選ばれた山の神聖性は日の出の標識となることによって高まったのだ、とわたしは考える。神聖な山はむしろ高天原

の神々に通じる場所なのだ。だから、三輪山のふもとの檜原神社に天照大神やイザナギ・イザナミが祀られたのだ。『記・紀』神話でも、黄泉の国から帰って来たイザナギは、前稿で議論したように岸边と考えられる「筑紫の日向のたちばなの小門(おど)」でみそぎをした。黄泉の国を、やはり、地下(根の国)と想定しているのだ。もちろん、太陽神が宿って入りこむ穴は根の国に通じる。だから、須玖岡本の冬至の太陽の道の標識である山は宮地岳と呼ばれたのだろう(宗像地域の宮地嶽も)。九州の弥生時代の遺跡では墳墓は集落の近くに築かれた。耕作地の確保のために陵墓が山際に築かれるようになって、死者の場所が山に結びつけられて、死者は山に帰ると想像されるようになったのではないだろうか。大和では、先ほど述べた地形が理由となって、墳墓が東の山の辺に沿って展開し、よけいにその想像を増幅しただろう。

神といえば、第10代崇神王の時代のこととして、三輪山の土着の神が登場する三輪山伝説が語られている。物語の女性は第7代王の王女のこととされるのだが、『記・紀』は箸塚がその王女の墓と言う。その伝説は、三輪山のふもとの有力者との“婚姻”を表現しているのかもしれない。実際、『記・紀』は、第7代王がこの地域の有力氏族の女性を後にし、その子が次の王になった、と語る。これらの説話は、神武王に始まる王統が、第7代になると、三輪山以北に勢力を拡大したことを暗示しているように思える。そう考えて図3を見ると、第7代王が唐古・鍵遺跡の真西(北緯34.5685度)に宮を置いたということが重大な意味をもつように思えてくる。この王は春分・秋分の太陽の道上に宮を置いたのだ。奈良盆地で伝統ある太陽の道を掌握する地位に就いたと解釈することが可能である。第10代崇神王が「初国を支配した王」という称号を得るほど勢力を拡大した始まりは、第7代王の時代にあったのかもしれない。第9代王の宮や陵が図3におさまりきれない北にあったという記事もその状況を暗示する。

ところが、王権の拡大は必ずしも政権の安定を意味しない、と世界の歴史は教える。

2. 中期王朝の「太陽の道」崇拜の痕跡

“応神王”の王位篡奪とその王朝

『記・紀』は、第15代応神王の時代に王統に屈折があったことを物語る。第12代景行王の孫(ヤマトタケルの子)でのちに贈られた名が仲哀という王子が、九州に行き、“神功”という女性と結婚して博多湾岸の香椎の宮にあったとする。生まれた子が応神である。神功の輝かしい伝説や、仲哀が亡くなると応神を立てて神功が摂政として権力を行使したとする説話の信憑性を論評しない。説話の森に分け入ると道に迷うだろう。理解できるのは、大和の王の血筋を引くとされる応神が九州から大和に行き、第15代の王位に就いたという説話の骨格である。事実だとしても、常識的に考えてこれがすんなりと運んだはずがない。

第13代成務王が父の景行王まで三代最盛期にあったはずの巻向ではなく近江の国

の天津に宮を置いた、という記述がこの政変に関係しているにちがいない。母の神功が応神を連れて兵庫に上陸すると戦闘になったという記述が史実を反映しているだろう。成務王が近江に避難したとすれば、戦争は一回や二回の戦闘では済まなかったかもしれない。防衛軍に応神の異母兄弟だという王子の名が挙げられていて、兄弟の王位継承の争いのように示唆するが、『記・紀』の記述からすれば、成務王はそれほど若くして亡くなったわけではなくそちらに継承者がいたとも考えられる。戦争は応神側が勝利する。その後、応神は景行王の孫の王女たちを后とし、息子の一人が王位を継いで第 16 代仁徳王となった。前王家は応神側の勝利を結局承認したのである。成務王の陵墓が今の奈良市にあるという記述は、休戦が成立したことを裏書きしているのだろう。

この王位獲得譚の骨格は、世界史の事例によく適合している。たとえば英国で、ヘンリー7世が傍系の血筋をたよりに、プランタジネット朝の前王家ヨーク家のリチャード3世を討ってテューダー朝初代の英国王に就いたのと軌を一にしている。リチャード3世は兄王の息子から王位を篡奪したのであるが、リチャード3世の甥である前王には姉があった。ヘンリー7世は、その王女を妻として継嗣をさずかった。歴史に名高いヘンリー8世である。ヘンリー8世は、傍系だが戦争に勝利して王位を勝ちとった父とプランタジネット朝の前王家ヨーク家の血筋も引いて、王としての正統性をもって生まれ強固な王権を行使することができた。

英国の語法に倣えば、第15代応神王は応神朝を始めたことになる。第16代仁徳王は、ちょうどヘンリー8世と同じ立場にあった。支配地の広がっていた巻向の前王家の権力を安定して掌握したように見える。仁徳王は、父のために、巻向にあった前方後円墳の形を引き継ぎながらそれを圧倒するほどの墳墓を築いた。そのそばに、前王家の血筋を引く母の大きな陵墓も同じ形式で築いている。仁徳王自身のとされる陵墓は、父を超えて最大の前方後円墳である（ここでは宮内庁の認定に従っておく）。応神王を王朝の初代として数えて六世代が、中国文明の波及効果が高まった古墳時代の最盛期に統治した。その期間は、おおざっぱに400年前ころから500年代の前四半期ころまでと考えられる。生産力は上がり、支配地も拡大したと推測される。

『記・紀』の記述によれば、前王家では子が父王の位を継承していたが、今度の王家では、仁徳王の次は三人の同母兄弟が第17・18・19代の王位に就いた。その次は、第19代王の二人の同母兄弟が第20・21代王に就き、第21代雄略王の子が第22代王になった。しかし、権力の強まった王位の継承が続くうちに、王族間の権力闘争が起きようになっていた。第17代履中王の子はいどこである雄略王に殺されていたが、第22代王に子がなくて、隠れていた履中王の孫が探し出されて第23・24代王に就いたという。この王朝最後の第25代王は第24代王の子である。プランタジネット朝のランカスター家とヨーク家の争いやヨーク家の内紛の場合のように、王権の統率力は多かれ少なかれ弱くなっていたのだろう。結果から見ると、そこにすきが生じたのだ。

応神朝の「太陽の道」崇拝の痕跡

本稿の主題は太陽の道である。ふたたび、王の宮と陵墓の位置を地図に書き入れて考察しよう。図4が応神朝の王たちについて表示したものである。この図は時代の進展をよく表現している。奈良盆地に形成された社会は、人口が増大し水稲耕作地の拡大を図ったのだろう。ほとんどの王墓が現在の大阪府に築かれて、王権が大阪の平野に注目していたことをうかがわせる。九州から来て王権を掌握した応神王の宮が奈良盆地にあったのか今の大阪市あったのか『記・紀』の記述はあいまいである。王位に就くまで争乱の状態だったとも考えられる。図には奈良盆地にある宮の伝承地を示した。王権が確立してから奈良盆地に構えたとされる宮は、前王家の本拠地から離れて三輪山よりも南にある。安全保障上の考慮でもあったのだろうか。次の仁徳王の宮は現在の大阪市にあったらしい。二人の本拠地は大阪平野の側にあつて、水田開発に力を注いだと考えられる。二人の墓とされる巨大な前方後円墳からも、大規模な耕作地の開発を行なったことが推測できる。図4を地形図で示すのは、奈良盆地東側の山々だけでなく、低地の広がる大阪府北部（古くは大阪湾につながる湖もあった）に湿地が多く、開発の対象地だっただろうことを示すためでもある。しかし、その開発は前代から始まっていたと考えるのが妥当かもしれない。

図4を一見して、北條論文が論じたように、応神朝の王墓が奈良盆地東の龍王山の山並みの西方に築かれたことが知られる。図4は、この埋葬が意図的になされたであろうことを強く示唆する。前節の唐古・鍵遺跡を焦点とする太陽の道が存在したという仮説からも、この見方が支持できる。北條論文では、たくさんの古墳の位置関係が詳細に議論されているが、わたしは、太陽の道という観点の導入を提案する以上に新しい論点を追加することができない。図4によって追加できることとしては、第18代王の宮（伝承地）が522mの峰のほぼ真西にあることと、第24代王の宮（伝承地）が唐子・鍵遺跡から見て夏至の日の出の方角にある高峰山のほとんど真西にあることと

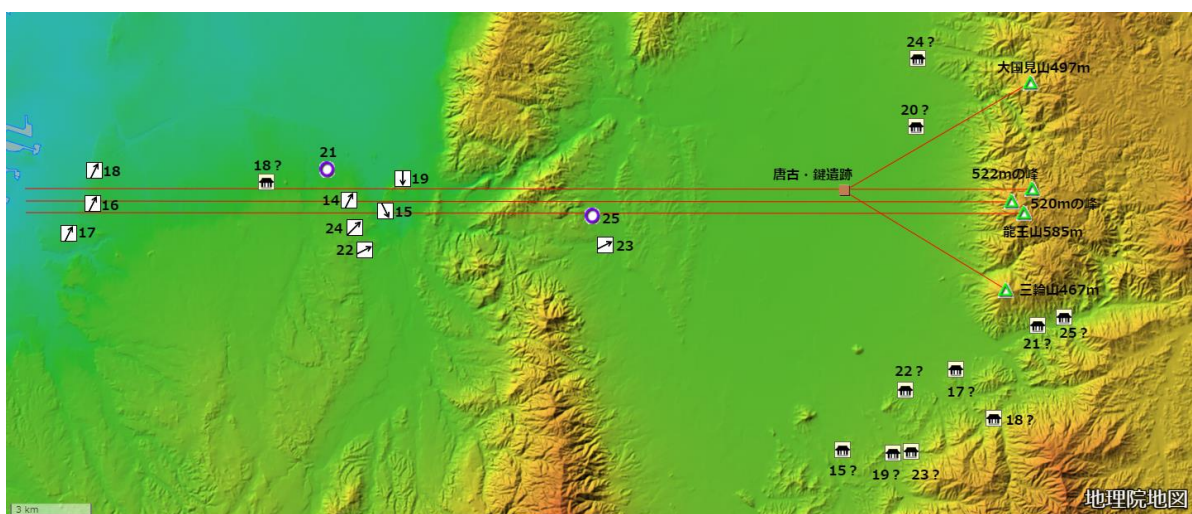


図4. 第15代応神王から第25代王までの宮と陵墓の位置：
家型の記号が宮の伝承地を、矢印をもつ四角は前方後円墳で、
紫の円はそう見えない陵墓を示す。番号で王の代数を表わす。

らいである。あとの議論のために、この時代に太陽の道の標識となる神殿は築かれなかったことに留意しておこう。

一つだけ、奈良盆地の外に築かれた陵墓の位置決めはどのようにして行なわれたかという問題がある。地理院地図で緯度を求めると、大阪湾岸に築かれた三つの古墳、南から上石津ミサンザイ古墳・大仙陵古墳・田出井古墳の後円墳は、それぞれ、北緯 34.5546 度、34.5649 度、34.5761 度に位置し、東の山側にある誉田山古墳の後円墳は北緯 34.5621 度に位置する。龍王山およびその北の 520m の峰と 522m の峰は、それぞれ、北緯 34.5615 度、34.5655 度、34.5697 度にある（北條論文の数値と誤差があるかもしれない）。図 4 から分かるように、仁徳陵とされている大仙陵古墳の後円墳中心点は、520m の峰ときわめて近い緯度であり、応神陵とされている誉田山古墳は龍王山三角点ときわめて近い緯度にある。緯度のずれはわずか 0.0006 度である。北條論文は、このように精確な数値を用いて墳墓群の配置を議論している。

しかし、実際に墳墓の場所を決定するときに、本当にこの精度で求められたかは別の問題である。測量によって東西線を決定しようとするすると誤差が発生する。その問題を考えてみよう。地理院地図で測定すると緯度の差 0.001 度は距離にして約 111m に当たるから、緯度のずれ 0.0006 度は南北の距離にして 70m 足らずである。520m の峰から約 35km の距離にある大仙陵古墳までの東西線を求めて、誤差が南北の距離で 70m だとすると、照準の角度のずれは $0.070/35 \text{ rad} < 0.12 \text{ 度}$ だ。非常な精度である。

『知られざる古代』が東西線測量の実験をしたことを書いている。三重県堀坂山頂上 (757m) からふもとを見通して真東の地点を決定したら、距離およそ 5km に対して約 20m の誤差、角度の誤差にして 0.23 度だったという（棒を立てて太陽光の影から東西方向を求め、その方向に標的の線香の光が見えるようにする方法でふもとの真東の位置を決定したという。ただし、山頂とふもとのあいだの連絡に現代の機器トーカーを使用した）。1/7 も短い距離の実験での誤差の方が大きい。大仙陵古墳の側で 520m の峰と同じ緯度の場所を求めるとすれば、南北方向の何か所かのそれぞれで道具を使って東西線を求め（誤差はまぬがれない）、35km も先の 520m の峰を見分けて目視で照準が最も合うところを探すというようなやり方しかないだろう（ここでも誤差が生じる）。誉田山古墳からは手前の山にはばまれて龍王山の山並みを見通せないようだから、少なくとも二度測量をしなければならない。誤差が拡大する可能性がある。二つの古墳がそれぞれ龍王山の二つの峰とほとんど同じ緯度に位置することが、このような測量で実現されたとすれば驚くべきことである。

九州の太陽の道では、東の宝満山と西の飯盛山が十分な精度で東西に並んでいる。宝満山と飯盛山を結ぶ太陽の道が満足のいくほど東西線上にあることを確認したあとでは、東西方向を道具で求めるのを省略して、二つの山へ照準を合わせるだけの近似的なやり方で東西方向を見定めたのだろう。距離が近いこともあって、そのやり方で三雲南小路遺跡そばの細石神社と須玖岡本遺跡そばの熊野神社の場所は精度よく決定できたと考えられる。

3. 大和の後期王朝と太陽の道の制定

“継体王”の王位篡奪から律令国家の成立まで

応神朝のすきをついて王位を篡奪する者が現われた。応神王の五世の孫で越前の人という。後世贈られた名が継体である。『古事記』は王位に就いた経緯に口をつぐむが、継体という諡号は王位継承に曲折があったことを表現する。継体王は応神王から数えて六代目で、応神朝が最後の武烈王まで六世代なのと対応する。応神王のところでヘンリー7世を引き合いに出したが、応神王よりも継体王の方が、か細い血脈のつながりを根拠に宗家の王位を奪ったヘンリー7世に似ている。ただし、これらの人は、前漢の景帝の六世の孫で後漢の光武帝となった劉秀のようにいったん倒された王朝を再興したのではなく、存続している王朝の宗家の混乱について位を奪ったのである。継体王が応神王の子孫ということを疑う人があるかもしれないが、本当である可能性は高い。中世まで家系は大事に守られた。戦国時代の武田家が清和源氏の流れを汲むことを信じてよいのである。そして、易姓革命の思想をつくった中国を別にして、王家についての伝統観念は恐ろしいもので、領域外から征服する場合を除いて、どの国でも王位に就く者には王家の血脈であることが求められた。人々が王位に就く人の血統を承認するのではなければ、旗頭となり追隨者を得て、王位を獲得することはむずかしい。日本だけではない。フランスのブルボン朝までのカペー王統もそうだった。英国の王位は現代までウイリアム征服王の血統によって継承されている。

継体王の王位継承も、応神王やヘンリー7世のやり方で正統性が強化された。すなわち、継体王は王位に就いたときにはすでに息子をもっていたが、第24代仁賢王の娘で応神朝最後の第25代武烈王の妹を后にした（仁賢王も、父を殺した第21代雄略王の娘を后として、武烈王と妹をもうけた。つまり、継体王の后は前王家の血を色濃く引いていた）。継体王のその后が、前王家の血筋を引く王子を産んだ。だが、継体王が亡くなったときこの王子はまだ幼年だったのだろう、尾張出身の母から生まれた兄弟が王位を継いで第27代と第28代の王となったという。そのあと、仁徳王やヘンリー8世のように、前代の王家の血脈として正統性をもつ王子が、第29代欽明王となった。これ以後の王たちは欽明王から正統性を継承することができた。この視点から見ると、「継体」という諡号の意味は味わい深い。

『記・紀』の記述はそれだけにとどまらない。欽明王の后は異母兄第28代王の娘で、その子が第30代敏達王となった。継体朝は王統の純血を守ることに熱心だったことが分かる。敏達王のあとは、蘇我氏の娘を母とする弟たちと妹が第31代・32代・33代の王位に就いた。純血を守ろうとする中でも、強大になった権力を握ろうとする権力闘争は生じた。外祖父として蘇我氏が権力を保持しようとしたのだろう、大和の王統で初めて女性王が誕生した。それが第33代推古王である。王家の血筋を引く王子たちが殺されるという事件が起きる。結局、本命ともいべき第30代敏達王の孫が第34代舒明王となった。欽明・敏達・舒明王の系統が本流となる。舒明王の后は、舒明王の異母兄の娘で、のちに第35代皇極王＝第37代斉明王となった。ふたたび女王が置かれたのは純血主義の王位継承が目指されたからだだろう。第35代皇極王

のとき、その子中大兄の王子による有名な蘇我氏誅殺事件が起き、第 36 代王に皇極王の同母弟が就いた。

歴史解釈に影響されないようにするために王統のことだけ記述して、どうもつまらない話になっているが、時の経過だけは示しているつもりである。中国の史書が、東晋と続く南朝四代の時代（おおよそ応神朝の時代に重なるだろう）、「倭」から中国に朝貢した王のことを記録して、日本列島の政治制度が成熟しつつあったことを教える。人口が増え生産力が増大した古墳時代、日本列島の古代社会は一つの高みに達しつつあったように見える。大和の王権は、瀬戸内海の奥の大阪湾をおさえ、南は紀伊半島、北は越(こし)・能登を支配して（継体王は越の出身で、第 27 代・28 代の王の母は尾張の出身という）、東方の領域を主導する位置を占めた。古墳の築造は関東地方に及んでそこが開発されていったことを示す（まだ東北地方は域外で、関東の武士団が強力になる時代よりもずっと前のことで、関東地方の発展は初期の段階にあったとしても）。600 年代になれば、支配の内実はともかく、大和の王権が近畿地方より東の国々に対して覇権を握っていたと見てよいだろう。

『隋書』は、南朝を滅ぼして中国を統一して間もない 600 年、倭国王「アメのタリシホコ」が使節を送ってきたと記す。607 年の二度目の使節のたずさえていた国書には、「日出るところの天子、書を日没するところの天子に致す」と書かれていた。大和の王統では第 33 代女王推古が統治した時代である。南朝に朝貢していた倭国は、南朝が蛮族視していた北朝から出た隋に対して対等の外交関係を結ぶ姿勢を示したのである。使者は口上で隋の皇帝を「海西の菩薩天子」と呼び、仏教を学ぶ数十人の僧も連れていた。本稿は日本列島古代の神々の信仰に関連する「太陽の道」を考察しようとしているのだが、日本式の祭政一致の体制が完成する前に、すでに仏教が政治制度に採り入れられようとしていたのである。隋が滅んでも、続けて、後継王朝の唐に使節が派遣されて、中国の制度・文物がさかんに導入されていった。

中国文明の流入によって発展していた朝鮮半島で、隣接する隋・唐との対立・交流は政治体制の変化までもたらした。隋・唐と戦った北の高句麗と南の百済・新羅の三国鼎立はゆさぶられ、高句麗を攻めあぐねた唐は、渡海戦略を採用して、百済と対立していた新羅と連合して百済に勝利した。倭国もこの東アジアの変動の外にいるわけにいなかった。倭国は、敗北した百済と組んで、唐と新羅の連合軍と戦う。しかし、663 年、白村江の戦いで敗北してしまい、百済は滅んでしまった。

この国際地政学上の重大事態は、二度目に即位した第 37 代斉明王の時代に起きた。この女王は一度結婚していたが、再婚して叔父である第 34 代舒明王の後になったのである。その子が、中大兄王子と大海人王子の兄弟である。蘇我氏を討った中大兄王子は、母である斉明王の王太子として政権の中枢にあった。『日本書紀』の語る変事を、その書く年数を信頼して記述してみよう。660 年、すでに 66 歳と高齢だった斉明王は筑紫に行った。二人の王子も随行した。百済が唐軍に敗れた年である。661

年、斉明王は筑紫で亡くなる。王太子は斉明王からの王位継承もせず、難事に対処したらしい。しかし、この期間の倭国の政治状況はそれほど明確ではない。東アジアの覇権国唐に対する戦争に敗れて孤立した倭国にとって死活の出来事だったはずだが、『日本書紀』は、戦争のことを語って、政治状況をあまり語らない。『日本書紀』の記述だけ読んで、大和の王権の政治体制が対外戦争の敗北によって大きな影響を受けたようには見えない。

『日本書紀』の斉明王と中大兄王子・大海人王子が筑紫に行ったという記述は、次のような具体的な記事からも信じてよいと考えられる。若い大海人王子は中大兄王子の娘たちを妃にしたのだが、同母姉妹は筑紫について行ったらしい。姉が年長の草壁王子を産んだあとに、妹の子は博多湾岸那の天津で生まれたので天津王子と呼ばれたというのだ。のちに天智天皇と天武天皇になる兄弟は、かなり長く筑紫に滞在したことになる。

中大兄王子が即位するまでに七年もかかった政治状況とはどのようなものだったのか、きわめて重大な問題だが、明らかになっているとはいいがたい。

大和の王位を七年間も空席にした(?)あと、668年、中大兄王子は大和の第38代王「天智」として即位する。当時としては死期も遠くない女王が二人の王子を引き連れて遠い筑紫に出かけてからの、足かけ八年の期間が日本国の画期だった、とわたしは考える(対外戦争の指揮のためだけなら、女性の王が出向かなくても王太子で事足りたのではないか)。筑紫で実際に活動したのは王太子である中大兄王子だっただろう。天皇の称号を名乗ったのが確実なのは、弟の大海人王子が大和の第40代王「天武」となってからだとされるが、わたしは、天智王が天皇位に就いて、天武はその皇位を継いだのだと考える。だから、天智王以後は、王の代わりに天皇という称号を使うことにする。天智天皇が天皇の称号で全国を統治するようになったという状況証拠が、大和の王統の長い伝統を破って奈良盆地を出て、都を近江国の大津に新しく築いたことである。新しい体制で統治を始めることを宣言するためだったと考えることができる。挙げることのできる証拠の一つは、『日本書紀』の書く漏刻の記事である。その記事は、単に時計の話をしているのではない。671年、天智天皇が大津の宮に漏刻を設置し鐘鼓を打って時刻を知らせたという記事は、国家の領域という空間とその領域の時間を統べる王になったことを表現している、とわたしは考える。漏刻を設置し鐘鼓を打つという行為は、中国の皇帝のしたことである。皇帝の版図で、ほかの者がそのようなことを命じる権限はない。その証拠が琉球にある。琉球を統一した尚王朝は宮殿の外の入場門を漏刻門と名づけてそこに漏刻を置いた。漏刻門に来た者は、宮殿内にいる王がこの国を統治しているということを目で見て確認するのである。

漏刻は中国式の政治体制の一つの要素で、日本や琉球でそれを模倣したのだが、太陽の道という日本や琉球の祭政一致の制度に関係する。だから、歴史解釈に踏み込んでしまうことを知りながら、それを議論した。

準備の話が終わる前に、もう二人だけ以下の議論に登場する天皇の名を出しておか

なければならない。大海人王子は、天智天皇の息子(第 39 代天皇)を討って、第 40 代天武天皇となった。草壁王子を産んだ天智天皇の娘が天武天皇の後になっていたが、天武天皇が亡くなるとその皇后が第 41 代の位を継ぎ持統天皇になった。子である草壁王子の帝位を安定にするためだっただろう。しかし、草壁王子が亡くなってしまう。草壁王子と持統天皇の異母妹とのあいだには男子があった。697 年、持統天皇は、まだ 15 歳のその孫（つまり天武天皇の孫）に天皇位を譲る。第 42 代文武天皇である。この文武天皇の代の 701 年、大宝律令が發布されて日本という律令国家が成立した。

天武天皇による太陽の道の制定

切れ味のわるい方法だけれども、また、王の宮と陵墓を地図に描いて考察しよう。第 35 代王のころから、王の宮は飛鳥に建てられ、飛鳥京と総称できるようになっていたが、天武・持統両天皇の代に、条坊プランの規模の大きな藤原京が建設された。だが、律令国家が成立すると、唐の長安に倣ってずっと広大な平城京が計画される。しだいに王都に近づいて以後の飛鳥京と藤原京を、図 5 では五角形の印で表現する。ほかの記号は図 4 と同じである。

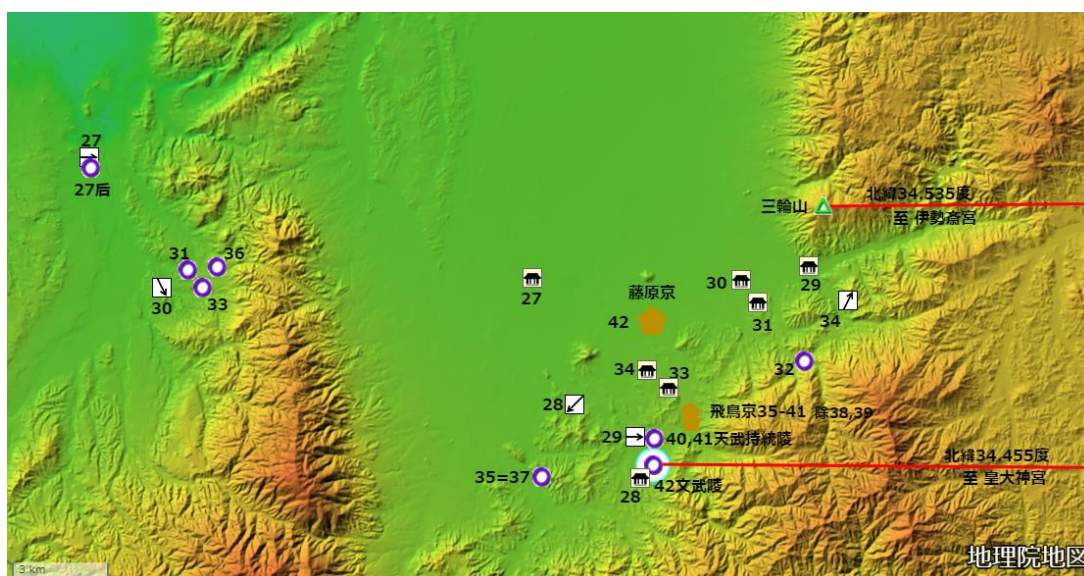


図 5. 第 26 代王から第 42 代王までの宮と陵墓の位置：

家型の記号が宮の伝承地を、矢印をもつ四角は前方後円墳で、紫の円はそう見えない陵墓を示す。番号で王の代数を表わす。

図 5 を見てみよう。『日本書紀』の記述によれば、この王朝の初代継体王の宮は長いあいだ淀川の北にあったようだ。大和にあった前王家との戦争状態から王位の継承が安定するまで、本拠地はそちらにあったと推測される。晩年に奈良盆地に落ち着いたらしいが、陵墓は本拠地に築かれた。それはこの地図の外である。以後の王たちの宮は奈良盆地に置かれた。陵墓は、しばらく大阪側に築かれたが、そのうち、王の宮が置かれた奈良盆地東南の山際に築かれるようになる。時代が進むと、明日香周辺に宮が置かれるようになり都城の機能を備えるようになっていった、と見える。この図

を見るかぎり、王宮や陵墓の場所を決めるのに、前王朝まであった太陽の道という観念を考慮した痕跡は見当たらない。継体王朝では、時とともに太陽の道の崇拜は廃れたと考えてよいだろう。

けれども、水谷慶一著『知られざる古代』が提出した「三輪山付近を通る緯度線に沿って太陽の道を設定して伊勢斎宮が建設された」という主張は正しい、とわたしも考える。三輪山と伊勢斎宮を結ぶ東西線の東の果ての伊勢湾に神島がある。これは、沖ノ島を通る海の太陽の道の西に神ノ島があり、琉球の太陽の道の西の海に神山島があるのに対応する。神島という名は、ここを通る東西線が太陽の道だということを証言しているのである。『知られざる古代』が出版されてから四十年近く経つ。今では地球測位システム(GPS)が利用できるようになって、任意の場所の緯度を格段に正確に知ることができる。国土地理院地図で、改めて三輪山三角点と伊勢斎宮遺跡（どの地点とするか問題があるけれども、地理院地図の示す目印の場所を採用した）の緯度を調べてみた。すると、三輪山三角点の位置は北緯 34.5350 度、斎宮跡は北緯 34.5404 度である。三輪山と伊勢斎宮の距離 68.5km に対して、緯度の差は 0.0054 度、南北の距離のずれにして約 600m だ。このずれは大きすぎると見えるかもしれないが、けっしてそうではない。

40 年前の『知られざる古代』は、箸塚と伊勢斎宮跡の緯度のずれは 3 秒、南北の距離にすると 92m と報告している。今、地理院地図で箸塚古墳後円部中心の緯度を求めてみると北緯 34.5392 度である。南北のずれは 130m 余りだから、このずれを角度で表示すると、箸塚から伊勢斎宮跡まで約 70.8km に対し $0.14/70 \text{ rad} < 0.12$ 度になる。誤差は、距離 5km 足らずの測量実験での誤差 0.23 度の半分だ。前節でも誤差のことに触れたが、この精度が測量によって実現されたものかはよく考えてみなければならない。古代、方位を教える標識もなく見通せない東西線を決定するには、箸塚にせよ三輪山にせよそのあたりから出発したとすると、図 5 が描く山中に分け入って現場で東西方向を測定しながら東に進む以外に方法はない。あとでも地形図を示すが、そこは険しい山で、見通せる尾根を探しながらの前進で、実験でなされたような測量を何度もくりかえさなければならない。誤差が集積する可能性が高い。三輪山と伊勢斎宮の距離 68.5km に対して南北の距離のずれが約 600m だとすると、総合の誤差を角度にすると $0.60/68 \div 0.0088 \text{ rad} < 0.51$ 度である。この誤差は後世の伊能図とくらべれば大きい（注記 1）、古代としてはかなりの精度で、これを偶然の一致とすることはできない、とわたしは考える。たしかに、三輪山と伊勢斎宮はほぼ同一緯度線上にあり、この東西線は太陽崇拜のシンボルとしての太陽の道だ、と判断する。

箸塚か檜原神社が出発点だったのではないかという人があるかもしれない。しかし、今の場合、緯度の一致のしすぎは落とし穴かもしれない。わたしは、陸の太陽の道という観念が生じた経緯からして、新しく制定された太陽の道は三輪山を基点とした、と考える。九州で、吉竹高木遺跡・三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡の三つの王墓が太陽の道を発生させたのではない。ほとんど同一緯度線上にある宝満山と飯盛山が

そこを通る太陽の道という観念を生じさせたのである。第2節で見たように、大和でも、弥生時代初期からの唐古・鍵遺跡の場所から春分・秋分の太陽が龍王山北の 522 m の峰から出るように見えることから、その東西線が太陽の道と見なされるようになったと考えられる。同じく唐古・鍵から、冬至の太陽が三輪山から昇るように見えることが、磐座のある三輪山をいっそう神聖視させたのである。また、『記・紀』の崇神王のときに天つ神を檜原神社に祀ったという話も、大神神社の神とともに語られていて、三輪山を神聖視することがあってそこに祀ることになったことを示唆する。三輪山周辺の拡大図を見れば分かるが、檜原神社は三輪山を仰ぐように建てられたのであって、箸塚の真東に位置するように建てられたのではない。須玖岡本遺跡も熊野神社にイザナギ・イザナミを祀ったからそこが神聖な場所となったのではなく、そこが神聖な山が指定する太陽の道上にあるから熊野神社をつくったのである。そうすると、冬至の太陽の道の標識だった三輪山こそが、太陽の道を制定しなおす標識にふさわしい。こうして、三輪山を基点に東へ測量して行って、新しい太陽の道となる東西線を定め、伊勢斎宮の場所を決定した、と考えるのが最も妥当なのである。

もう一度図 5 を見ると、その新しい太陽の道が王宮や陵墓の位置と無関係であることが確認できる。すると、どうしてそのような新しい太陽の道を制定する必要があったのかという問いが生じる。

伊勢斎宮跡は遺跡として調査されている。斎宮歴史博物館の公開している膨大な資料を調べるゆとりが今のわたしにはないので、「斎宮跡発掘資料選（平成元年刊）」を参考にした。古墳時代以前や飛鳥時代の遺構・遺物が見つかったているが、大半は奈良時代以後のものだという。飛鳥時代の遺構は狭いところに局在していて、掘立柱建物もしくは屏の柱穴が 6 棟分しかないという。須恵器の出土も少なく、大半は 7 世紀後半のものらしい。この調査報告からすると、天武天皇 2 年の 674 年、「大来皇女、泊瀬の斎宮より、伊勢神宮に向かう」という『日本書紀』の記述が本当のようだ。『日本書紀』の記述法からして、斎宮という宗教施設は泊瀬に置かれていたが、この記事の時代に伊勢斎宮が建設された、とするのが順当だろう。権力を強めていった天武天皇が国家的事業として伊勢斎宮を創建したのだ。そういう事業だから、あれだけの精度で三輪山と同一緯度線上に斎宮を建設できたと理解できる。しかし、こう理解しても、新たに大和の太陽の道が制定された理由を説明したことにはならない。依然として問いが残る。

わたしにはもう一つ問いがある。政府としてかなりの手間をかけて測量して太陽の道を設定したのに、その後なぜそれから外れた現在の場所に伊勢神宮を建設（移転？）したのかという問いである。『知られざる古代』はこの問いを発していない。しかし、この問いも議論されるべきだろう。皇大神宮のそばを流れる美しい五十鈴川が答えているのかもしれない。九州の神社では浜辺でお汐井とりをするのが根づいた慣例である。琉球でも太陽の道の祭事にはお汐井とりをした。海辺の地先から日の出や日の入りを拝む本来の太陽の道のあり方からすると、太陽崇拝の神事のための神殿は海辺に

近いところが最適だとされていたのだろう。事実、伊勢神宮は、昔から神事に使う塩を自前の塩田でつくってきたそうだ。御塩浜と呼ばれる塩田が五十鈴川の河口から約1km上流の汽水域にあるという。この問題はあとでまた議論する。

こう考えてきたわたしに、皇大神宮の場所を特定する標識があるのではないかというアイデアが浮かんだ。地図を眺めていて答えが見つかった。図5を見た人は東西線がもう一本引かれていることに気づいているだろう。歴史解釈をできるだけ控えようとする頼りない方法がヒットしたのだ。伊勢の皇大神宮を通る東西線を引くと、ほぼその線上に第42代文武天皇の陵墓がある。地理院地図で緯度を調べると、皇大神宮が北緯34.4549度に、文武天皇陵が北緯34.4606度にある。誤差は0.0057度だ。三輪山-伊勢斎宮の場合と同程度の精度で東西線上にあるのだ。図6が、今度の測量も険しい山地で行なわれたことを教える。その困難さを考えてみれば、眼が感知する線の傾きを大目に見なければならない。緯度の差0.0057度は距離にして630m余りだ。皇大神宮から文武陵まで84km余りを真西に進んで行ったつもりで、文武陵のところで約630m北にずれたことになる(角度にすると $0.64/84 \div 0.0076 \text{rad} < 0.44 \text{度}$)。GPSのない古代としては十分な精確さで測量されたと言うべきだろう(注記1)。文武天皇陵は皇大神宮を通る東西線上に築かれたと結論できる。

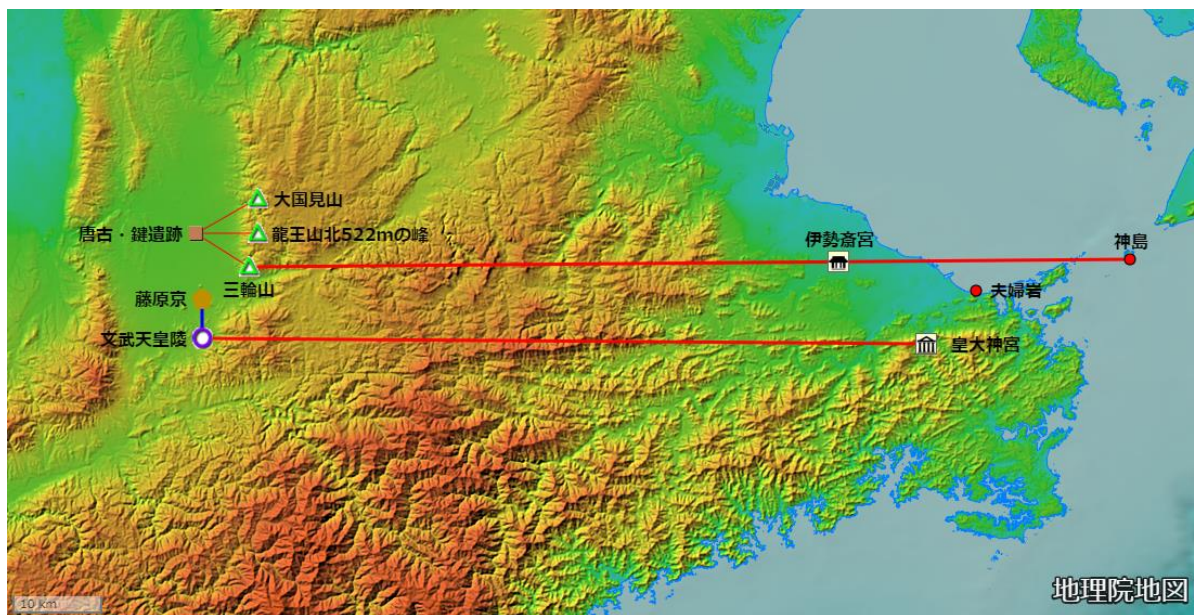


図6. 大和で制定しなおされた太陽の道

伊勢斎宮を通る太陽の道よりもこちらの方が太陽の道にふさわしいことを指摘しておこう。磐座をもつ三輪山が奈良盆地で古くからの霊山だったとしても、その神は高天原神話に出ない地祇であって、天つ神天照大神の相方として太陽の道を指定するのに最適ではない。それに対して、文武天皇陵が皇大神宮を通る東西線上に築かれたことは、九州の吉武高木遺跡・三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡の王墓がみな宝満山と飯盛山を結ぶ太陽の道に築かれた古例に則ることになるのである。

大和の太陽の道は、三輪山-伊勢斎宮東西線からこちらの方に制定しなおされた、と考えなければならない。なぜなら、文武天皇こそ律令国家を開始した天皇で、大宝律令は日本式の祭政一致の新制度を導入したのである。その制度の下、太政官に並んで神祇官を置き、皇大神宮を別格として、全国の神社を格付けして神祇官の下で支配することを行なった。制度上、文武天皇が皇大神宮を設置したことになる。だから、制定された新律令体制の下で、文武天皇陵と皇大神宮とを結ぶ東西線は、太陽神を皇祖神として祀るのに最もふさわしい太陽の道と言える。

こう考えるのにもう一つの重大な証拠がある。図5をもう一度見て、文武天皇陵の北に何があるか確認してほしい。藤原京があるのだ。今度は経度を調べる番だ。地理院地図を拡大すると、藤原京の目印は東経 135.8072 度に置かれていて、文武天皇陵の中心点は東経 135.8074 度くらいにある。藤原京の目印から文武天皇陵の中心点までの距離 4.62km に対して経度で 0.0002 度の差だ。ところがよく見ると、藤原京の南には朱雀大路跡が残っていて、その経度は東経 135.8074 度だ。つまり、文武天皇陵の中心点はほとんど藤原京の中心線の延長上にあると考えてよい。藤原京の条坊を決めるとき、縄張りの縄を延長したかのような経度の一致なのだ。

すると、藤原京の主で新しい太陽の道の制定者である文武天皇は、東に皇大神宮を建てて神聖化した東西線「太陽の道」上で、かつ、藤原京の中軸となる子午線上真南の場所に埋葬されたのである。吉竹高木遺跡や琉球の太陽の道は、何よりも王のいる場所を中心として制定されたのであった。しかし、大和の太陽の道は、先に“太陽神の宿る”皇大神宮を建設したので、王宮をその緯度線上に築くことができなかった。そこで、次善の策をとり、子午線を補助線として王宮を太陽の道の東にある皇大神宮に連結したのだろう。こうして、曲折はあったが、琉球王朝の場合のように、新しい国家体制が新しい太陽の道を制定した、と考えることができる。

4. 九州で制定された新たな太陽の道

第二の論点に移ろう。日本列島の水稲栽培文明は最初に根づいた現在の福岡都市圏で着実に発展して、吉竹高木遺跡・三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡がその発展期の状況を教えてくれる。先の論考「『太陽の道』の考古学」は次のことを論証した。それら三つの遺跡の時代に、古代の信仰の中核となった太陽崇拝がその地域で宝満山と飯盛山を結ぶ東西線を聖別し、その太陽の道が、それら三か所の“王都”をその東西線上に置かせるほどの影響力をもったことである。この陸の太陽の道は、この地域の北の海にある沖ノ島を通る元来の「海の太陽の道」とともに、かなりの年代にわたって日本列島西部で最も権威ある太陽信仰の象徴であったと考えられる。

弥生時代から古墳時代に移行しても、須玖岡本周辺でしだいに大きな古墳がつくられた。高祖連峰の西側でも、平原遺跡が時代の進展を示し、続く時代にその地域にくつも前方後円墳が築かれた（大和の王たちの墳墓が大阪平野に築かれたのに似ている）。ひるがえって、各地の弥生時代の遺跡は、水稲栽培文明が日本列島西部全域に広がっ

たことを教える。最先進地域だった博多湾糸島水道の沿海地域でも、生産力が上がり人口が増えるにつれてその地域では狭すぎただろう。筑後平野への進出は最初期からあったにちがいない。地理的につながる九州島はもちろん、各地に移住する人々があったと考えることができる。博多湾糸島水道沿海地域以外からも移住していっただろう。そういう数世紀のあいだ、最先進地域だった福岡都市圏、奈良盆地、あるいは大きな勢力になったほかの地域とその周辺でどんなことが起きたか、政治・経済の進展を想像してみる必要がある。前節まで、奈良盆地を中心とする領域についていくらかそういう考察をしたことになる。

第4節の対象領域は、福岡都市圏を含む九州島である。課題は、古墳時代以後、これまで尊崇されていた宝満山と飯盛山を結ぶ太陽の道が、博多湾糸島水道沿海地域を含んで統合されていった広い領域で、どのように変化したかを考察することである。

推論 設定しなおされた陸の太陽の道

緒言に、今回の思索は昔『知られざる古代』を読んだときに芽生えた、と書いた。緯度を調べるのに国土地理院の大きな地図を買うしかない時代のことである。長門二見が浦の夫婦岩が沖ノ島と同一緯度線上にあることに気づいたのはその時のことだ。そして、伊勢神宮と宇佐神宮が近畿地方と九州地方のそれぞれで相似な位置を占めることにも気づいた。詳しい地図で調べると、宇佐神宮を通る緯度線上に、太陽の道の構成要素になりうる夫婦岩と呼ばれる巨石と目立つ山があり、王都というべき大宰府政庁跡があった。この東西線は太陽の道だと直感した。しかし、そのアイディアは時の流れのなかに埋もれた。

ところが今度、吉武高木遺跡で冬至の日の出を見る山が油山で、須玖岡本遺跡で冬至の日の出を見る山が宮地岳だと知って、昔のアイディアがよみがえった。吉武高木で「冬至の太陽の道」の標識となる油山三角点よりも少し東にもう一つ三角点がある。そのそばに、山にあるのになぜか夫婦岩と呼ばれる二つの巨石がある。三角点とされるほどだから見晴らしのよい場所で、北側と東側に視界が開けている。東北東にある須玖岡本も見通せ、逆に、須玖岡本から夫婦岩のある高みが見えて、その後方に油山三角点の峰が見える。今茂っている木を切り倒せば、その真東に形のよい円錐形をして目立つ大根地山が見えるはずだ。大根地山は、若杉山・宝満山とならんで修験道のさかんな山だったという。山頂に大根地神社がある。地図は、大根地山のはるか東方に宇佐神宮があると言う。そして、油山夫婦岩と大根地神社の中間あたりに、九州の政治の中心だった大宰府政庁跡があるのだ。その上、大宰府政庁跡は須玖岡本の熊野神社と宮地岳を結ぶ冬至の太陽の道の線上にあることが分かった。

前節では、大和で、以前は冬至の太陽の道の標識だった三輪山が別の役割を担う基点となって、新しい太陽の道が設定しなおされたことを見た。九州でも、宝満山・油山・宮地岳の役割を振り替えて、太陽の道の焦点を須玖岡本から東南東の大城山の南麓に移して、新しい太陽の道が設定されたのではないか。それを検討するに値するほど、登場する山はどれも太陽の道の標識となる資格をもち強い関連を主張している。

それではまた地理院地図で緯度を測定しよう。油山夫婦岩は北緯 33.5188 度、大根地山の三角点(652m)が北緯 33.5195 度である。大根地山三角点から油山夫婦岩までの距離 21.52km に対して、緯度の差は 0.0007 度（拡大図によると 0.00063 度）で、南北の距離にすると約 70m である。この緯度の差は、25.12km 離れた宝満山と飯盛山の緯度の差約 0.003 度（南北の距離にして 333m）よりもかなり小さい。角度のずれにして、前者は $0.070/21 \div 0.0033 \text{ rad} < 0.20 \text{ 度}$ で、後者は $0.333/25 \div 0.0133 \text{ rad} < 0.77 \text{ 度}$ だから、大根地山山頂と油山夫婦岩を結ぶ直線は、宝満山と飯盛山山頂を結ぶ線よりもずっと緯度線に近い。第 2 節で触れたように、道具を使う測量によって東西線を定める実験で約 5km の距離に対して角度で表わした誤差が 0.23 度だったことからすると、大根地山山頂と油山夫婦岩は、測量しても東西線上にあると見えただろう。この二つの自然標識はそれほど精確に東西に並び、春分・秋分の日を出を拝む太陽の道と指定するのに十分な資格をもっているのである。

須玖岡本の熊野神社から南南西 2km 余りのところに日拝塚と呼ばれる古墳がある。春日市「奴国の丘歴史資料館」の説明によれば、築造年代が 500 年代前半と推定される横穴式石室をもつ前方後円墳で、周溝を含めると全長 61m。銅鏡・装身具(金・銀・玉製)・武器・馬具・須恵器など首長墓にふさわしい副葬品が多量にあったという。その説明で見逃せないのは、彼岸の時期に東方にある大根地山から昇る朝日を望めることから日拝塚という名がついたという記述である。グーグル・マップの航空写真を見ても主軸は東を向いている。緯度を調べると日拝塚は北緯 33.5232 度であり、大根地山三角点の緯度 33.5195 度よりも 0.0037 度北にある。ずれを南北の距離にすると 410m 余りで、日拝塚から大根地山までの距離約 15.8km に対してかなり大きい。しかし、山の尾根から昇る日の出が南寄りになることを考えると、そこから春分・秋分の太陽はちょうど大根地山山頂付近から出るように見えるのだろう。日拝(ひはい)塚という名がついたのがいつか不明だが（この訓みは日本語としてこなれていず、初期からこの漢字表記があったのかもしれない）、伝統ある宝満山と飯盛山を結ぶ太陽の道を崇拝していた地域のことだから、大根地山から昇る朝日を望める場所を選んで築かれた可能性がある。それ以前に油山夫婦岩と大根地山を結ぶ新しい太陽の道が設定されていたのではないか、と思わせる。

第 1 節・第 2 節でかいま見てきた大和の王権の拡大を参照すれば、時代が進んで水稻生産地の重心が福岡都市圏から筑後川流域の平野に移った古墳時代、その両地域を支配するような王権が成立した蓋然性が高いだろう。そのとき、古くからの伝統を引き継ぐ吉竹高木・三雲南小路・須玖岡本を通る太陽の道はこの領域で王権の権威づけの一つと見なされただろうから、王権の継承がどのようなものだったにしろ、広域に成立した王権が「太陽の道」崇拝を祭政の重要な手段とした可能性は高い。

この推論をもう少し進めてみよう。玄海灘から筑後平野までの領域を支配しようとしたのだとすれば、博多湾を望む須玖岡本あたりよりも筑後方面を意識した場所の方

が王都を置くのに適しているだろう。太宰府政庁跡はそういう場所にある。ただし今は、そこに大きな政庁が築かれたよりも以前の古墳時代を考えようとしている。“前太宰府”と呼べるような王の宮がそこに置かれたのではないか、というアイディアである。大城山の南側は、交易の拠点である博多湾に近く、農業生産の中心地筑後平野をもにらみ、地政学的に最適な場所である。グーグル・マップの航空写真を見れば、そこが防衛の観点からもすぐれていることが分かる。北から東南にかけては大城山・宝満山・宮地岳の山地で守られ、南西側にも天拝山から基山に続く山地がある。博多湾岸に通じる西北は、のちに水城の築かれたことから分かるように隘路に近い。南側も、東西にある宮地岳と基山にはさまれて狭くなっている。太宰府の場所は風水によって選ばれたという話を聞くが、何よりも、政治・軍事上の合理的観点から、その盆地状の場所がこの領域を支配するのに適しているのである。

王が王宮を置くのにさらに考慮するとすれば、人々の信仰を利用できる「太陽の道」という観念だろう。須玖岡本からも近い大城山の南麓は、そういう関連づけができるところだ。先に太宰府政庁跡が須玖岡本の熊野神社と宮地岳を結ぶ冬至の太陽の道上にあるということに触れた。ということは、太宰府政庁の場所から見ても、冬至の日の太陽は宮地岳に昇るということである。地理院地図で改めて測ると、大宰府政庁跡北端から宮地岳三角点へ伸ばす直線が緯度線となす角度は約+27度である。大宰府政庁跡を中心とする平面上で冬至の日の出の方角を求めてみると約+28度だ。大宰府政庁跡から見ると、冬至の太陽はおおよそ宮地岳頂上付近から昇るように見えるのだ。それだけではない。須玖岡本遺跡・吉武高木遺跡・三雲南小路遺跡を結ぶ太陽の道の要をなした宝満山が、大宰府政庁跡から見てちょうど夏至の日の出の昇る方角にあるのである。緯度線となす角度を求めると約-29度で、「日月出没計算サービス」の与える数値に一致する。つまり、それまで崇められてきた宝満山御嶽は、こちらの場合にも、夏至の日の出の標識として役目を担う。北にある大城山が宝満山と飯盛山とを結ぶ太陽の道の副標識だったことも言い添える必要があるだろうか。

須玖岡本は、春分・秋分の日には宝満山から、夏至には砥石山北の峰から、冬至には宮地岳からの朝陽が交差するスポットにあったのだが、大宰府政庁跡のあたりは、春分・秋分の日には大根地山から、夏至には宝満山から、冬至には宮地岳からの朝陽が射し込むスポットなのである。その上、真西にある油山夫婦岩が、日の入りを拝む夫婦岩という古来の太陽崇拝の要件を具えている。そこに立てば、大根地山から太宰府へ射しこむ春分・秋分の日の出も拝むことができる。（ちなみに、伊勢二見が浦の夫婦岩は皇大神宮を通る緯度線上にはなくて、ここや長門二見が浦の夫婦岩のような太陽の道の鳥居の役目を果たさない）。したがって、油山夫婦岩と大根地山を結ぶ東西線を新しい太陽の道と設定しなおせば、大城山の南麓は北部九州で伝統の「太陽の道」という信仰形式を引き継ぐことができ、王宮を置くにふさわしい場所なのである。

こうして、春分・秋分の日の出と日の入りを拝む大根地山と油山夫婦岩とを標識とする太陽の道と、以前も太陽の道の標識だった宝満山と宮地岳を標識とする夏至と冬至の太陽の道の交点に、“前太宰府”王宮が建設された、と推論できる。そこは、宝

満山と飯盛山とを結ぶ太陽の道にあった吉武高木・三雲南小路・須玖岡本の王たちがそういうスポットに暮らした伝統を継承できるのだ。ただし、一つだけ疑問が生じる。太宰府政庁跡北端の緯度が北緯 33.5151 度だという点だ。太宰府政庁跡は、標識となる油山夫婦岩と大根地山から距離が近くて測量可能なのに、大根地山と油山夫婦岩を結ぶ東西線よりも少し南にずれている。夫婦岩との緯度のずれが 0.0037 度（距離にして約 410m）、大根地山との緯度のずれが 0.0044 度（距離にして約 490m）ある。弥生時代後期、須玖岡本の王の宮が宝満山と飯盛山を結ぶ太陽の道からどのくらい逸れていたか分からないが、最初の吉竹高木遺跡では王族の居住場所はこの太陽の道上の墓域近くにあったと推定されているから、「前太宰府」王宮も大根地山と油山夫婦岩とを結ぶ東西線上近くに置かれたと考えられる。少なくとも、「太陽の道」の祭祀を行なった場所は、北緯 33.5151 度よりももう少し北にあったと考えるべきだろう。この問題は注記 2 で考える。

歴史に踏みこんで議論していないのに言うのはおかしいが、ここまでの推論を大局的に表現すれば次のようになるだろう。博多湾系島水道沿海地域で、板付遺跡で始まった水稲栽培の発展した弥生時代に、吉竹高木遺跡・三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡に代表される先進“文明圏”が形成されたが、その領域が拡大発展した古墳時代になると、その拡大領域を支配する王権が成立し、王宮は大城山の南麓に置かれただろう、というものである。そのような王宮を推定するのは、大城山南麓を焦点とする（春分・秋分、夏至、冬至の）新しい太陽の道が設定されたと考えられるからである。政治制度を整える段階に至った古墳時代、前代に高天原神話によって形成された古代信仰とそのシンボルとなった「太陽の道」を、祭政一致の政治制度に組みこんで継承する必要があったからだ、とわたしは考える。

大城山南麓にあったと想定する“前太宰府”とのちに建設された太宰府を区別することが今はできないが、歴史の出来事が段階を踏んで進展することを考慮すれば、時代を分けて考えなければならない。ここでは、二ないし三段階を想定しておこう。最初は、王宮を筑後平野をにらむ場所に置くことが必要になり、大根地山と油山夫婦岩を通る東西線を太陽の道と設定した時代、続いて、体制の整備を図って、宇佐神宮ともう一つの神殿を建築して太陽の道を一新した時代、ここまでを“前太宰府”の時代と呼ぶ。後期は、大宰府政庁跡を残すことになるいわゆる太宰府の時代である。

仮説 神殿によって体系化された太陽の道の制定

上記の推論を支持するのが宇佐宮の存在である（神宮名を得たのは明治になってからということだから、ここからはこう呼ぶ）。ふたたび、精確な緯度を調べる方法を採ろう。地理院地図によれば、大根地山三角点が北緯 33.5195 度にあるのに対して、宇佐宮本殿は北緯 33.5235 度にある。大和で三輪山を基点にして真東を目指して測量していったと考えたように、大根地山から測量を始めたとなると、宇佐宮まで九州山地を横断して 71.4km の距離を進んだことになる。誤差は 0.0040 度、距離にすると約

450mである（角度にして $0.45/71 \div 0.0063 \text{ rad} < 0.37 \text{ 度}$ ）。三輪山と伊勢斎宮の場合よりも精度がよい。大和の二つの東西線（三輪山－伊勢斎宮と皇大神宮－文武天皇陵）を太陽の道と見なすのなら、大根地山－宇佐宮の東西線も太陽の道と見なすことのできる精度である。

わたしは前段の推論を検討に値する仮説にまで高めようとしているのであるが、厳格に言えば、第3節で議論した伊勢斎宮と皇大神宮を通る大和の二つの太陽の道も、この節で提起する宇佐宮を通る太陽の道も同水準の仮説である。宝満山と飯盛山を結ぶ春分・秋分の太陽の道は、須玖岡本遺跡・吉竹高木遺跡・三雲南小路遺跡を貫くことでその存在を保証されたけれども、今度の太陽の道はそれに匹敵するほどの証拠をもたない。太陽神天照大神の祭祀にかかわる皇大神宮は、大和で編纂された『日本書紀』その他の文献に何度も登場する周知の神社で、それを支える体制が現代まで続いて人々の崇拝が維持されているので、太陽の道がそこを通っていると主張できる強い説得力をもつ。それに対して、宇佐宮は伊勢神宮のような今日まで続く太陽神崇拝の伝統を残していないので、油山夫婦岩－大根地山－宇佐宮を結ぶ東西線を太陽の道とする証拠は薄弱と見えるのである。ところが、外形的な根拠をよりどころにすれば、大和の太陽の道も九州の太陽の道も同質の仮説なのである。

ところで、宇佐宮－大根地山－油山夫婦岩の東西線を宝満山－飯盛山の東西線と比較して気づくのは、後者では王の住まいの近くにあった神社は祭祀の場所だが太陽の道の標識とまで言えなかったのに対し、新しい太陽の道では大きな神殿がその神聖性を明示する標識となったらしいということである。大和でも、それ以前は太陽の道を指示するための神殿はなかったのに、新しく建造された皇大神宮が太陽の道を表現するものになった。これは、文化面での時代の進展、とくに人々の宗教的態度の変化に対応しているのだろう。皇大神宮は600年代末期に建てられて新しいから、その変化は九州で先に生じたと考えられる。

この観点から見ると、宇佐宮－大根地山－“前太宰府”－油山夫婦岩を通る東西線が太陽の道である有力な証拠がある。太陽の道という観念は、「『太陽の道』の考古学」で論じたように、もともと太陽神が宿るように見えた沖ノ島を通る東西線を太陽の道と見立てることから始まった。九州の陸の太陽の道は、その海の太陽の道に準じるようにして設定されたのである。そして、沖ノ島を通る太陽の道の祭祀を司るのが宗像大社である。ところがなんと、宗像大社は太宰府政庁跡を通る子午線上にあるのだ。地理院地図で調べると、「都督府古跡」石柱が立つ太宰府政庁跡の正中線の経度は東経 130.5152 度で、宗像大社の本殿は東経 130.5129 度にある。ただし、グーグル・マップが出す宗像大社本殿の位置は東経 130.5144 度だ（地理院地図の本殿の図面とちがっていて、本殿が建て替えられたことが分かる）。宗像大社本殿と太宰府政庁跡正中線との経度の差は 0.0023 度（現在の本殿の位置を採用すれば差は 0.0008 度）にすぎない。地理院地図で測ってみると、宗像大社の緯度では経度 0.001 度の差は距離にして 92.8m に当たる。太宰府政庁のあった場所から宗像大社まで距離 34.8km を真北に進んで、距離にして 210m 余り（角度にして $0.22/34 \div 0.0065 \text{ rad} < 0.38 \text{ 度}$ ）

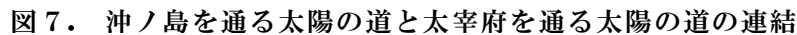
しかずれなかったということである。山々を越えての測量の誤差としてはやはり小さい（測量は太陽の南中する方角を見定めながら行なわれたのだろう）。宗像大社を、太宰府政庁のあった場所を通る子午線上に建設しようとしたことは確実である。

それまでの宝満山と飯盛山を結ぶ陸の太陽の道は、山頂が磐座の宝満山から沖ノ島を遥拝できることが支えとなっていたのだが、沖ノ島を通る海の太陽の道との連関という点で弱かった。“前太宰府”を焦点として新しく制定された太陽の道の体系は、子午線を補助線に使うことによって、海の太陽の道と陸の太陽の道を連結した、と考えることができる。“前太宰府”を通る子午線上に宗像大社を設置したことで、そこから真北を向いて宗像大社を遥拝すれば、沖ノ島に最も近い大島の御嶽を通し、手前の三つの岩礁を鳥居として沖ノ島にいる太陽神を礼拝できることになった。ずいぶん観念的だが、時代の進展がこの合理化をさせたのだろう。新しい陸の太陽の道では、“前太宰府”から真東の大根地山を見ながら春分・秋分の日を出を拝むことになる。それは、宝満山御嶽の代わりに建立された宇佐宮を遥拝することである。宇佐宮は、宝満山の竈門神社よりも新しい役割を担って、神殿に拝礼することが太陽神を敬うことになったのだろう。西の標識である油山夫婦岩が、“前太宰府”・大根地山のかなたにある宇佐宮を遥拝する鳥居の役目を担う。“前太宰府”で、吉武高木・三雲南小路・須玖岡本の王たちよりも、太陽神の宿る沖ノ島を身近に感じることができるようになったのである。しかも、そこで南面する人は、背後の沖ノ島にいる太陽神の代理として着座することになる。

以上が本稿の到達した仮説である。それを図に表わせば図7のようになる。以下、この仮説を補強する議論をいくつかしよう。

宗像三女神は沖ノ島・大島・宗像大社の三か所に配祀され、宗像大社は沖合の大島を通して沖ノ島を礼拝する神殿である。だから、神殿を建てる場所は、沖ノ島から大島へ伸ばす直線の延長上で大島に見える海岸近くがふさわしい。しかし、それが可能なのにそうはされなかった。宗像大社本殿は、沖ノ島と大島を結ぶ直線と太宰府政庁跡を通る子午線の交点にある。“前太宰府”を通る子午線上に建てるという要請が、神殿を、海に浮かぶ大島を見通せない奥まった場所に引き寄せたのである。

それでも、宗像大社は沖ノ島をご神体とするのだから、本殿は当然沖ノ島の方角に向いているはず。ところが、宗像大社・大島・沖ノ島を結ぶ直線が子午線となす角度が約-39度なのに対して、地理院地図を拡大してみると、本殿と参道は子午線から約-23度しか傾いていず沖ノ島の方を向いていない。しかし、先ほど指摘したように、グーグル・マップを見れば、宗像大社本殿の位置と外形が変わり、参道も作りなおされたことが分かる。現在の本殿と参道は子午線に対し約-41度の方角を指している。建て替えのとき沖ノ島の方を向くようにされたと思われる。過去にも、このように旧来の神殿のあり方を尊重しない変更が行なわれたのだろうか。だとすれば、神殿の向きを議論しても無駄だろう。以前の本殿と参道は漠然と海の方を向いていて、



- 前稿「『太陽の道』の考古学」で、宗像大社・大島の方角からは、沖ノ島に太陽が沈むようには見えないのになぜそこが沖ノ島を礼拝する神社になったのか説明がつかないという問題を提起しておいた。宗像大社が太宰府政庁跡と同じ子午線上にあることが明らかになった今は、この問いに答えることができる。本州西岸・九州北岸・壱岐・対馬の沿海領域で太陽の宿る島と見立てられたことから、沖ノ島を通る太陽の道という観念が生まれたのだが、この領域の最先進地域にあった三つの弥生遺跡を通る太陽の道が示唆するように、太陽の道は王権の設定したものである。すると、太陽の道で最重要な沖ノ島の祭祀を行なうための神殿は、その沿海領域で権威をもつ王によって建てられたと想定するのが妥当である。そして、神殿が現在太宰府と呼ばれる場所を通る子午線上に置かれたとすれば、主宰する王はそこにいたと考えるべきだろう。今では忘れられてしまったけれども、宗像大社は九州で制定された太陽の道の神殿で、神殿の建設によって、そこから沖ノ島を礼拝することが慣例となったのだ。

29

宇佐宮本殿（上宮）はその低地の南にある標高 39m の小高い山の上に建てられていて、本来の入り口は、小山の南を西から東流する寄藻川の細い支流の側にある。この地形からすると、この小山は西から突き出た地先に見えて、宇佐嶋という見立てが成立しうる。そのように見立てれば、宇佐宮は、太陽の道で春分・秋分の日を出を拝む神殿となる資格がある。その小山に登る石段を北向きにつくるのは困難でないはずなのに北向きから逸れている。地理院地図を拡大してみると、本殿自身が太陽の南中方向からわずかに東向きで、石段はその方向と一致する向きにつくられたことが分かる。

太陽神にかかわる神殿が太陽光を受けるように南向きなのは理解できるが、神殿の向きをずらすほど影響を与えたのは何だろうか。自然現象としてわたしが思いつくのは地磁気か星の方角である。地理院地図は磁北を描くことができるようになっている。それを出してみても驚いた。磁北線はちょうど階段の主軸と神殿の正中線を通っている。偏角は -7 度 20 分とある。ああ、宇佐宮神殿の向きは地磁気の向きによって決定されたのだ、と思った。前稿でも触れたように、首里城の王宮正殿の棟が磁北線に沿っていたのだった。この問題を考えてみよう（注記 3 で補足する）。

その前に、まず、古代に地磁気の向きを知ることができたのかを問う必要がある。指南という言葉は紀元前の中国の書物に現われるが、それが磁石を使ったものか疑問視されている。しっかりした計器としての方位磁針が文献に登場するのは北宋の時代だという。だが、中国では、磁石はずいぶん古くから知られていて、建物を建てる時に家相家が実用したという話などがある。だから、方位磁針の前身は古くから文献に散見される指南魚あるいは指南勺だったと考えられている。ただし、摩擦力を受けるスプーン型の指南勺が実用的なものだったか疑問がもたれていて、木片に磁石を埋めこんで水に浮かせる指南魚は六朝時代にはあったというのが一般的な理解らしい。この通説に従うと、倭がさかんに中国の南朝と交流した 400 年代には、指南魚を使って地磁気の方角を知ることができた、と考えてよいだろう。指南魚という言葉が示すように、北ではなく南を知る道具である。太陽を礼拝する神殿を建てるに際し、中国流にそれが指す方位を尊重したというのはありそうなことである。

しかし、落ち着いて考えてみれば、地磁気の偏角は年月とともに変化することが知られている。古代の地磁気の偏角はどうだっただろうか。インターネットで探したら、酒井秀男「古地磁気年代測定法の考古学・人類学への応用」という文献が見つかった。そこには、広岡公夫の論文「西日本の過去 2000 年間の古地磁気の研究」から引用した過去の地磁気偏角の変動を示すグラフが載せてあった。そのグラフによれば、西日本で偏角が -7 度前後になったのは、1 世紀後半、400 年代後半、1000 年代、1900 年代以後の四度だけである。宇佐宮の建築年代に該当可能なのは 400 年代後半だろう。インターネットにもう一つ、畠山唯達「日本考古地磁気データベース」というのが見つかった。このデータベースは、緯度と経度を入力すると、400 年から 2000 年までの各年の地磁気を計算してくれる。それを使って宇佐宮で偏角が -7 度 20 分を中央値として ± 1 度の範囲にあった年代を求めると、470～490 年という結果が得られた。

宇佐宮本殿と石段が指南魚の指す方角に向けて建造されたとして、このデータを信じれば、宇佐宮本殿は 480 年前後に建てられたことになる。現在得られている古地磁気偏角の精度が宇佐宮本殿の建築年代をこれほど狭い年代で確定できるのか、わたしは確言することができないが、宇佐宮が建てられたのが 500 年よりも前である蓋然性は高い。

宇佐宮が建てられたのが 500 年以前という推定は、この節の初めに述べた年代観とよく調和する。油山夫婦岩と大根地山を結ぶ新しい太陽の道を設定し、さらに宇佐宮と宗像大社をつくって陸と海の太陽の道を拡張連結したのは、太陽の道という観念がまだ力をもっていた時代だということになる。たとえば、春分・秋分のころ大根地山に朝日が昇るのが見えるという春日市の日拝塚古墳が築かれたのが 500 年代前半とする考古学の推定と矛盾しない。先ほど触れたように、宇佐宮は寄藻川の湿地帯に突き出た小山に築かれた。和氣清麻呂が船を止めたという船つなぎ石のあたりが古代の海岸と考えられるから（地形図はそれより東側が干拓地だと教える）、昔の河口からおよそ 3.3km 上流に築かれたのだ。箱崎八幡宮でよく知られた福岡の神社の「お汐井とり」の風習に適した場所として選ばれたことをうかがわせる。宗像大社も似た地形の場所にあり、そばを流れる釣川の河口から約 3km の場所にある。やはり「お汐井とり」の風習と関係するだろう。伊勢神宮に神事のための塩を採る御塩浜が付属しているのは、古い宇佐宮の形式に倣ったものと考えられる。ただし、皇大神宮は、五十鈴川沿いだが、昔の河口と推定できるあたりから測っても 6km 以上も上流の森閑とした場所に建てられた。時代の進展を教える。

太陽の道の神殿として宇佐宮と宗像大社が 600 年代末期の伊勢神宮よりも古いことは、重要な論点となるだろう。宇佐宮から“前太宰府”へ伸びる太陽の道を、そこから北に向かう子午線でつないだ宗像大社を介して、沖ノ島に接続したやり方が、大和で、皇大神宮を通る太陽の道上に文武天皇陵を築き、さらに子午線を補助線に使って藤原京に接続する前例になった可能性が高い。

この節の議論は次のように要約できる。すなわち、— 宝満山と飯盛山を結ぶ太陽の道は、“前太宰府”を焦点とする新しい太陽の道に更新された。それは、真東の大根地山と真西の油山夫婦岩を結ぶ東西線上に王宮を建設し、その東の延長上に宇佐宮を建てることによって制定された。その陸の太陽の道は、王宮を通る子午線上に宗像大社を建てることで、沖ノ島を通る海の太陽の道と連結された。こうすることで、のちに太宰府となる“前太宰府”は、宇佐宮という神殿で聖別された東西線「陸の太陽の道」だけでなく、宗像大社を介してつながる「太陽神の宿る沖ノ島」によって祝福される特別の場所となった。その際、以前の陸の太陽の道で尊崇されたイザナギ・イザナミなどの高天原の神々とニニギ・ホホデミなどの国つ神を、沖ノ島の太陽神と適合的に連結するように信仰の体系化が行なわれたと推測される。宇佐宮と宗像大社はその信仰体系をシンボル化する神殿であり、太陽の道は一新された 一と。

5. 結語

以上の結論は、できるだけ歴史書に依拠せず、外形的な事物だけを根拠に得られたものである。しかし、広く議論されるのでなければ仮説の境遇を抜け出すことができないだろう。本稿でこれ以上へたに歴史解釈を交えると、第3節で見つかった大和の太陽の道と、第4節で得られた九州における新しい太陽の道の体系が受け入れられるのを妨げる恐れがある。検討・議論が十分ではないけれども、純粋な結果だけを提示して批判を俟つことにする。

*注記1 伊能忠敬の実測地図の精度

1800年代初期、伊能忠敬は、進歩した方法と測量器具を用いて測量し、日本地図を作製した。その高名な伊能図で、方位の最大誤差が約0.3度あった。また、距離の最大誤差は1/300、緯度の測定誤差は1分 $\div$ 0.017度、経度1度の長さの誤差は0.2kmだった。(ブリタニカ国際大百科事典)

*注記2 “前太宰府”で太陽の道の祭事を行なうにふさわしい場所

太陽の道は、季節の節目に太陽を礼拝する祭事を行なうにふさわしいスポットを焦点として設定される。その場所で祭事を主宰する王はすぐ近くに王の宮を置いたと考えられる。ところが、大根地山と油山夫婦岩を結ぶ東西線を新しい太陽の道とすると、本文に示したように大宰府政庁跡北端の緯度は若干南寄り、太陽の道の祭事はそれよりも北側の場所で行なわれたと推定される。そこで、大宰府政庁跡の北側の地形を調べてみよう。すぐ北側には政庁とは別の建物があったと考えることのできる区画がある。この一帯は、北の山すそをおおよそ東西に走る小道で限られる。その辻に「旧小字大裏」と刻んだ標石が立っている。辻の北側は林を切り開いて平らにしたと思われるところに、「日管寺」という名の寺がある。日管寺の西側は木の生えた山すそだが、林に入る道があってその北端は北緯33.5173度である。日管寺の西側の山すそのさらに西側には住居があり、もっと北まで棚田が続く。のちの太宰府条坊復元図を見ても、北端は日管寺あたりにあったようだ。小高くなった日管寺付近の林を切り開けば、東の大根地山と西の油山夫婦岩を見通し、さらに宝満山と宮地岳を見て、春分・秋分、夏至、冬至に、太陽の道の祭事を行なえただろう。王が宮を構えることができるのはその南側の平坦な場所である。

*注記3 地磁気の方角と社寺の建物および首里王宮正殿の向き

宇佐宮と建築年代が近い可能性のある社寺をまず取り上げる。地理院地図で由緒の古い社寺を当たってみたら、出雲大社の約1kmある長い参道の方角がちょうど現在の地磁気の偏角-7度40分に一致することが分かった。本殿の正中線はそれからほんのわずかずれているが、宗像大社であったように旧殿の位置と方位を引き継ぐことに熱心でなけ

れば、建て替えのときにずれが生じるだろう。変化しにくい長い参道から考えれば、出雲大社も地磁気の指す向きに建てられた可能性が高い。宇佐宮と出雲大社での偏角のわずかな差は、地磁気が場所によって違うからである。「日本考古地磁気データベース」を使って算出すると、出雲大社の場所で偏角が -7 度 40 分を中央値として ± 1 度の範囲にあった年代は、やはり $470\sim 490$ 年と出る。出雲大社も宇佐宮と同じころ現在の向きに建設されたことを示唆する。500年以前の日本列島で、筑紫や出雲や大和を中心とするかなり大きな政治領域が並立していたととらえれば、それぞれの領域で代表的な神社が建てられたと解釈することができる。そのころ、中国との交流によって指南魚のような器具が流入し、その指南する方向に向けて神社を建てるということが起きたと。

800年代中ごろ宇佐八幡宮の神託によって建てられたとされる岩清水八幡宮も確かめてみたら、参道の方位が地磁気の方に近かった。しかし、現在の偏角 -7 度 30 分からはずれている。何よりも、本殿はほぼ南を向いている。等高線を見ると、参道は男山の地形に沿うように建てられたと分かる。結局、一つの例外を除いて、古くて名の知られた近畿地方の社寺で地磁気の方角に向くように建てられたらしいものを見つけることはできなかった。大和で古い飛鳥寺も例外ではない（現在の建物と周辺の道の方位を見ても地磁気の方に注意をはらったようには見えない）。例外というのは法隆寺である。講堂から中門までの正中線と南大門までの200m余りの参道が、現在の地磁気の偏角 -7 度 20 分の方に走っている。さらに南側にある二本の参道も同じ傾きで300mぐらい続いている。東にある夢殿と外郭も同じ方向に向いている。だが、法隆寺は600年以後の建築のはずだ。西日本の古地磁気データは500年から1000年ころまでのあいだ偏角は -10 度以上傾いていたとするので、建築時の地磁気の方角が主軸を決めたのではないことになる。謎の多い法隆寺がどうして南中線から逸れる向きに建てられたのかも謎である。斑鳩宮もしくは法隆寺の場所には以前何かがあって方位を指定していたのだろうか。

首里王宮正殿の棟が現在の偏角 -5 度 0 分の方角に向いているのもうまく理解できない。琉球の王宮が最初に建てられたのは1400年代だろうが、「日本考古地磁気データベース」は、首里城の場所で1800年以前の偏角はプラスだったと出す。沖縄本島はこのデータベースの適用範囲外なのだろうか。この問題があるので、現在までに集積された古地磁気データがどこまで有効なのか若干の疑問が生じる。

参考文献

- 考古学の学術論文は、北條芳隆（東海大学）「景観史における前方後円墳の時代」と「東の山と西の古墳（考古学研究第59巻4号、p26-46）」だけを読んだ。この二つの論文は、前稿ができて糸島市・福岡市・春日市の遺跡担当の人に話を聞いてもらったとき、糸島市の平尾和久氏が提供くださったものである。
- 伊勢斎宮遺跡については、公開されている斎宮歴史博物館の「斎宮跡発掘資料選（平成元年刊）」をインターネットで読むことができ、わずかに参考にした。
- 手元にある文献は、『古事記』（岩波文庫）、『日本書紀』（岩波書店、日本古典文学

大系)、『中国正史日本伝(1)』(岩波文庫)、『朝鮮正史日本伝1』(岩波文庫)、『知られざる古代』(水谷慶一著、日本放送出版協会)だけである。孫引きした小川光二著『大和の原像 古代祭祀と崇神王朝』はまだ読んでいない。

- 古地磁気の偏角を知るのに次の文献を利用した。
酒井秀男(富山大学理学部)「古地磁気年代測定法の考古学・人類学への応用」。
そこに示されているグラフは、Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2000 years in Southwest Japan. *Memories. Fac. Sci., Kyoto Univ., Series. Geol. & Mineral.*, 38, 167-207. によるという。
- 各地の古地磁気の偏角を求めるのに、畠山唯達(岡山理科大学)「日本考古地磁気データベース」を利用した。
- 現在の各地の地磁気偏角は地理院地図で求めた。
- 遺跡・王の宮・陵墓などの緯度と経度は国土地理院地図で求めた。図1から図7は、地理院地図の機能を利用して作成したものである。
- 遺跡・王の宮・陵墓などの場所を見つけるのにグーグル・マップも利用した。
- 夏至と冬至の日の出の方角を海上保安庁海洋情報部の「日月出没計算サービス」で求めた。
- あとの情報源はインターネット上に記載された記事で、主としてウィキペディアと地方自治体の公開情報を利用した。